



公益社団法人日本環境教育フォーラム

清里ミーティング2015

報告書

日 時：2015年11月14日(土)～16日(月)
会 場：公益財団法人キープ協会 清泉寮
山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
主 催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
後 援：環境省、文部科学省、林野庁
山梨県、日本環境教育学会
協 賛：アサヒビール株式会社
J-POWER(電源開発株式会社)
損害保険ジャパン日本興亜株式会社
公益財団法人損保ジャパン日本興亜環境財団
日能研
特別協力：環境省 グッドライフアワード
飲料協賛：株式会社伊藤園
参加者：174名



公益社団法人日本環境教育フォーラム
清里ミーティング 2015

目次

開催趣意	1
スケジュール	2
「清里ミーティング」これまでの実績	3
1日目 開会式・全体会1	
開会式	11
全体会1	
キーノートスピーチ	12
ワールドカフェ方式・ディスカッション	16
2日目 3時間ワークショップ	17
全体会2 「世代を超えて一緒に〇〇おう！」	36
オプションプログラム	38
10分プレゼンテーション	39
早朝ワークショップ	44
当日募集ワークショップ	45
3日目 全体会3・閉会式	49
参加者データ	50

開催趣意

今年で通算29回目となる「公益社団法人日本環境教育フォーラム清里ミーティング2015」

今年も、11月14日(土)～16日(月)の3日間にわたり、公益財団法人キープ協会清泉寮・山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターを会場に開催した。

このミーティングは、主に以下の2点を全体のテーマとしている。

1. 参加者同士のネットワークの構築
2. それぞれの環境教育活動を再確認し、理念や意識を共有する場

ますます深刻になりつつある環境問題を解決する取り組みの一環として環境教育がある。環境問題を解決し、住みやすい社会にしていくためには、まず、諸問題を知り、気づき、関心を持ち、問題意識を共有することが大切である。

そして、自然はさまざまな分野と密接につながっていることから、それぞれの分野に携わる人と人（または団体）がつながりを持ち、共に手を携えていくことが必要である。

全国各地から研究・教育・行政・企業・NGO・NPO など環境教育の現場で働く人々同士のつながり＝ネットワークを大切にし、継続的に育んでいくことが社会を動かしていく力の源になると考えている。そのために、お互いの活動を理解し、認め合い、共に考え、力を合わせていける場の基盤づくりを目的として、本ミーティングを開催している。

清里ミーティングの特徴

清里ミーティングの最大の特徴は、参加者の皆様が“主役”であること。

どんなことについて話し合い、共有し合うのか、参加者主体で作りに上げていくという性格を持っていること。

今年の特徴

2015年のメインテーマは、「地域をつくる環境教育」

国連「持続可能な開発のための教育（ESD）の10年」が2014年で一段落し、今後の環境教育として“地域”にスポットを当て、地域をつくる環境教育をメインテーマに開催された。

今回の清里ミーティングでは、全体会をはじめ、10分プレゼンテーションや3時間ワークショップなどでも“地域”に関連する話題提供・ディスカッションが複数展開された。

全体会1の中では、第1部で「『農的生活学校』の学び方」というテーマで、関係者から基調講演をいただいた。また、第2部では、ワールドカフェ方式で1部の講演を受けての感想や疑問点など、参加者同士でのディスカッションを行った。

また、全体会2では、「世代を超えて一緒に歌おう！」を合言葉に、歌と環境教育のつながりを考えた。歌には人を動かす大きな力があり、各地で歌い継がれてきた童謡などには、地域の自然をモチーフにしたものも数多くある。また、さまざまな地域で行われている野外フェスの盛り上がりは、環境教育に興味のない人たちを巻き込んでいく余地があり、今後の可能性が期待される。そんな歌と環境教育のつながりを考える時間を持った。

スケジュール

●1日目：11月14日（土）

10:30～	受付開始
11:00～11:30	ちょっと早めに到着された方のための先取り交流企画（自由参加）
13:00～15:30	開会式 全体会1 <ul style="list-style-type: none">●キーノートスピーチ「農的生活学校」の学び方●参加者全員による「ワールドカフェ」方式のディスカッション
15:30～16:15	休憩・チェックイン
16:15～18:30	10分プレゼンテーション
18:30～20:10	夕食
20:10～20:45	10分プレゼンテーション
21:00～	情報交換会 <ul style="list-style-type: none">●「人と組織の紹介処（コンシェルジュデスク）」開設●人材・仕事探しのお手伝い「環境教育リクルート」コーナー開設●GEMSのお立ち寄りワークショップ屋台出店

●2日目：11月15日（日）

7:00～ 8:00	早朝ワークショップ（自由参加）
7:30～ 9:00	朝食
9:00～12:00	3時間ワークショップ 午前の部
12:00～13:30	休憩・昼食・移動
13:30～16:30	3時間ワークショップ 午後の部
16:30～17:00	移動
17:00～18:30	全体会2「世代を超えて一緒に〇〇おう！」
18:30～20:30	夕食
20:30～	情報交換会 <ul style="list-style-type: none">●「人と組織の紹介処（コンシェルジュデスク）」開設●人材・仕事探しのお手伝い「環境教育リクルート」コーナー開設●GEMSのお立ち寄りワークショップ屋台出店

●3日目：11月16日（月）

7:30～ 8:30	朝食
8:30～ 9:00	チェックアウト
9:00～11:30	当日募集ワークショップ
11:30～11:45	移動
11:45～12:45	全体会3・閉会式「全員参加型 ディスカッション」
12:45～13:45	さよならパーティ
14:00	解散 <ul style="list-style-type: none">●オプション企画「清泉寮ペレットボイラー見学ツアー」（14:00～15:00）●オプション企画「地域開拓の原点・清里歴史ガイドツアー」（14:00～15:00）

「清里ミーティング」これまでの実績

第1回清里フォーラム

- 日時：1987年9月28日(月)～29日(火)
- 参加人数：93人
- 主催：清里フォーラム実行委員会
- 【分科会】①環境教育について（考え方とその論理）
 - ②自然観察の中に今後とりこんでいきたいもの
 - ③指導者とボランティアの養成を今後どうするか
 - ④施設運営とコーディネーターの在り方について
 - ⑤自然観察の有料化について
 - ⑥清里フォーラムの将来性・方向性について
- ゲスト：加藤幸子（小池しげんの子）

第2回清里環境教育フォーラム

- 日時：1988年11月13日(日)～15日(火)
- 参加人数：151人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／山梨県
- 【分科会】

前半 ①学校と環境教育	後半 ①地域・開発と環境教育
②地域社会と環境教育	②施設と環境教育
③施設と環境教育	③人づくりと環境教育
④自然観察と環境教育	④市民・行政・企業・学校の協力
⑤企業と環境教育	⑤環境教育の目的と方法
	⑥学校と環境教育
	⑦企業と環境教育
- ゲスト：ロバート・ピナウィーズ（元ヨセミテ国立公園管理事務所長）

第3回清里環境教育フォーラム

- 日時：1989年11月12日(日)～14日(火)
- 参加人数：168人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①小中高における環境教育カリキュラム
 - ②若い世代に楽しいプログラムとは
 - ③環境教育をうまく経営していくためには
 - ④環境教育の場でボランティアが活躍できるためには
 - ⑤環境教育で村おこしができるか
 - ⑥大学における環境教育
- ゲスト：ジェームス・サノ（元マリン・ディスカバリーズ専務理事）

第4回清里環境教育フォーラム

- 日時：1990年11月18日(日)～20日(火)
- 参加人数：163人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会／(財)日本環境協会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①学校教育 ②事業化
 - ③プログラム ④人づくり
 - ⑤施設 ⑥地域開発・村おこし

※この年4月より上記6つの研究部会が発足。

- ゲスト：ジョセフ・コーネル（ネイチャーゲーム考案者）

第5回清里環境教育フォーラム

- 日時：1991年11月17日(日)～19日(火)
- 参加人数：187人
- 主催：清里環境教育フォーラム実行委員会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①学校 ②事業化 ③プログラム
 - ④人づくり ⑤施設 ⑥地域社会
- ゲスト：ステイーブン・メドレー（ヨセミテ・アソシエーション会長）

*1992年9月 任意団体 日本環境教育フォーラム発足

*1992年7月 「日本型環境教育の提案」発刊

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '92(通算6回)

- 日時：1992年9月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：132人
- 主催：日本環境教育フォーラム設立準備会
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【紹介WS】①エコツアー報告・ヨセミテ自然学校
 - ②New School of Conservationにおける環境教育
 - ③ペンギンリザーブ活動報告
 - ④国際理解教育・資料情報センター活動紹介
 - ⑤フィールドミュージアムごっこ
 - ⑥環境教育国際セミナーに参加して
 - ⑦成城学園における「散歩」「遊び」
- 【体験WS】①さあ、みんなでやってみよう！開発教育シミュレーション
 - ②エコロジーキャンプつまみぐいハイク
 - ③ネイチャーゲーム入門
 - ④もしフィールドでけがをしたら
 - ⑤PLTプログラムの紹介
- 【分科会】①学校での環境教育 ②地域に根ざした環境教育
 - ③エコツーリズムの可能性とその問題点
 - ④環境教育のプログラム教材開発
 - ⑤指導者養成について ⑥エコマネジメントのしかた

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '93(通算7回)

- 日時：1993年11月14日(日)～16日(火)
- 参加人数：154人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【体験PRG】①ネイチャーゲーム ②死の準備教育の試み
 - ③マインドクロッキー ④パートナーシップへの挑戦
 - ⑤究極の自然観察会 ⑥たずね鳥をさがせ
- 【分科会】①プログラム ②施設 ③学校
 - ④人づくり ⑤企業 ⑥地域・自治体
 - ⑦エコツーリズム ⑧海外の国立公園情報
- ゲスト：アン・ロベッタ（ストーリーテラー）

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '94(通算8回)

- 日時：1994年11月27日(日)～29日(火)
- 参加人数：167人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【体験PRG】①ネイチャーゲーム ②ファイブ・トリック
 - ③森の宝箱をつくろう ④地球救出作戦
 - ⑤枯れ木に花を咲かせましょう ⑥清里・冬物語
- 【分科会】①企業 ②エコツーリズム ③都市環境教育
 - ④ネイチャートレイル ⑤自然学校
 - ⑥ネイチャーライティング ⑦フォーラム塾
- ゲスト：ジョン・エルダー（ミドルベリー大学英語学・環境学教授）

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '95(通算9回)

- 日時：1995年11月25日(土)～27日(月)
- 参加人数：185人
- 主催：日本環境教育フォーラム
- 後援：環境庁／文部省／山梨県
- 【分科会】①自然学校としての施設づくり ②行政・自然学校
 - ③自然学校の経営を考える ④自然学校の人材育成
 - ⑤自然学校のプログラム
- 【WS】①写真で環境教育 ②あなたにとって出会いとは何ですか
 - ③環境教育を企画・プロデュースする
 - ④ソフトクリーム姉ちゃんをねえ！
 - ⑤未知なる可能性を求めて
 - ⑥キープ・フォレスターズ・スクールズのプログラム体験
 - ⑦ネイチャーゲーム、アジアと環境教育
 - ⑧独特な日本人に有効な環境教育戦略は？
 - ⑨アース・アート ⑩メディアワークショップ

日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '96(通算 10 回)

■日時：1996年11月16日(土)～18日(月)

■参加人数：174人

■主催：日本環境教育フォーラム

■後援：環境庁／文部省／山梨県

- 【分科会】
- ①自然学校の「事業化」
 - ②自然学校でのプログラム
 - ③地域振興と環境教育
 - ④環境保全活動がそのまま環境教育
 - ⑤エコツーリズムの様々な可能性
 - ⑥JEEFの法人化など今後の可能性

【ワークショップ】

- ①ネイチャーゲーム入門講座
- ②ネイチャーエクスポアリング
- ③清里での川の環境教育を考える
- ④「子供であそぼう」についての御紹介
- ⑤元気がでる自然観察
- ⑥環境教育の本質を考える
- ⑦環境教育を企画・プロデュースする
- ⑧清里で「海の環境教育」を考えよう
- ⑨自然をテーマにしたスライドショー
- ⑩自分への気づきと NGO
- ⑪清里インターネット通信社へようこそ
- ⑫森だくさんの自然体験
- ⑬まちを遊ぼう
- ⑭未知なる可能性を求めて
- ⑮エコビレッジを作ろう
- ⑯アクティビティの“パクリとアレンジやローカライズ”

※1997年4月 環境庁主管の法人格を取得、

社団法人日本環境教育フォーラム設立

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '97(通算 11 回)

■日時：1997年11月15日(土)～17日(月)

■参加人数：170人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／山梨県

- 【分科会】
- ①環境教育の指導者養成
 - ②環境教育の新しいプログラム開発
 - ③環境教育とまちづくり
 - ④環境教育の情報の発掘と提供
 - ⑤企業や行政とどのように組むのか？
 - ⑥新しい交流集会のスタイル

【WS】

- ①ネイチャーゲーム入門講座
- ②自然と心・心とひとのコミュニケーション
- ③環境教育の服装計画を考える
- ④出たとこ勝負の自然観察会+人間ウォッチング
- ⑤環境教育を企画プロデュースする
- ⑥環境教育と経営と税金
- ⑦インターネットサインをつくらう
- ⑧ディーブエコロジー・ミニワークショップ
- ⑨フィリピン流！演劇ワークショップのすすめ
- ⑩安全管理チェックリストをつくってみよう
- ⑪ネイチャーエクスポアリングコースづくり
- ⑫水辺でさがすいろいろなつながり
- ⑬アクティビティと小道具
- ⑭キープの自然体験プログラム
- ⑮博物館をつくらう！
- ⑯野外における企業研修の実際とその可能性

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '98(通算 12 回)

■日時：1998年11月14日(土)～16日(月)

■参加人数：176人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

- 【分科会】
- ①公共事業における環境教育の役割
 - ②森林・里山における環境教育と地域振興
 - ③アメリカの環境教育プログラムの日本への導入
 - ④動物と関わる環境教育
 - ⑤日本型エコツーリズムについて
 - ⑥メディアと環境、その先にあるもの

【ワークショップ】

- ①環境教育個人商店を考える
- ②私のきもち、みんなのきもち、地球のきもち
- ③21世紀のインターネットを求めて
- ④おきらく やまんぼの部屋
- ⑤プロジェクトワイルド「水生生物」に学ぶ
- ⑥エコマネーのすすめ
- ⑦もし参加者が野外でケガをしたら
- ⑧ネイチャーエクスポアリング
- ⑨エコスピリチュアルワークの試み
- ⑩アクティビティ大賞実施編・体験編
- ⑪これまでの50年とこれからの50年
- ⑫川を設計してみよう
- ⑬「おもい」を「かたち」にはじめの一步
- ⑭自然学校でめしが喰えるか

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング '99(通算 13 回)

■テーマ：「学ぶ心・育つ力」

■日時：1999年11月13日(土)～15日(月)

■参加人数：185人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

- 【分科会】
- ①自然学校の運営を考える
 - ②「総合的な学習の時間」で学校と地域をつなぐ
 - ③都市型の生活環境をテーマにした遊び場づくり
 - ④森から見つめる川と海
 - ⑤エコツーリズム一歩前へ
 - ⑥見つめよう地域の里山、伝えよう里山の魅力
 - ⑦チルデンを越える！
 - ⑧教育を考える

【早朝 WS】

- ①カラスのきもち
- ②朝のティータイム
- ③きもちとキモチをつないだら
- ④五感で感じよう清里の自然
- ⑤オカリナ・ハナリナ体験教室

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2000(通算 14 回)

■テーマ：「原点を見つめよう」

■日時：2000年11月11日(土)～20日(月)

■参加人数：171人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境庁／文部省／林野庁／山梨県

【体験 PRG】

- ①野外での救急法を覚えよう
- ②ネイチャーウォッチング in 清里
- ③清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
- ④心と体で感じよう！ネイチャーゲームが案内する清里の自然
- ⑤竹を使ったものづくり
- ⑥羊の毛から糸つむぎ教室
- ⑦自分という自然に出会う
- ⑧Frog (カエル)
- ⑨プロジェクト・アドベンチャー

- 【分科会】 ①自然体験活動における体験学習法
②ゆったり楽しむ ノスタルジーワーク
③虫を知る・入門
④「センス・オブ・ワンダー」って何だ？
⑤学校ビオトープの可能性
⑥五感を使って楽しみながら自然探検
⑦環境教育とスピリチュアリティ
⑧企業・行政マン向け環境教育テキスト作り
⑨自然学校のPR活動を考える
⑩Out of Treasure Boxes
⑪民話・ことわざから考える日本人と川の関係
⑫エコツーリズムのビジネスネットワークを考える
⑬表現を楽しもう！「シアターゲーム」

- 【早朝 WS】 ①野遊び手遊び発見隊
②センス・オブ・ワンダーの体験
③地球と私の合作づくり “1枚の葉”
④見て、聴いて、感じて…朝の森でネイチャーゲーム
⑤早朝ジョギングワークショップ
⑥キモチときもちをつないだら

■スライドプレゼンテーション

■JEEF 理事による3分トーク

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2001(通算15回)

■日時：2001年11月17日(土)～19日(月)

■参加人数：192人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/農林水産省/林野庁/山梨県

- 【体験 PRG】 ①清里の晩秋を味わうキープ流自然体験
②初心者歓迎！清里の自然をネイチャーゲームで楽しもう
③秋の味覚を楽しもう！
④「ほっ♪」となるたき火講座
⑤身体感覚講座
⑥The Bear (ひぐまの生き方、暮らし方)
⑦プロジェクト・アドベンチャー
⑧やまねミュージアムへ行こう

【分科会】

- ①総合的な学習の教材として「拾ったもの(生きもの)に関連するもの」を活用する
②「いまだき」の子ども・「いまだき」の親 改造計画！
③博覧会を環境教育という視点から評価する
④ゆったり過ごすやまねば流ネイチャーワーク
⑤ワークショップという新しい学び方をめぐって
⑥朝からイキナリ！若者で語ろう！の会
⑦小さな子どものための環境教育の“技”をさぐる
⑧地域の昔話を中心にした環境教育
⑨農業と林業を語ろう！農業者と林業者と語る環境教育
⑩Environmental Education in English
⑪北九州博、きらら博で行われた環境教育プログラムはこれだ！
⑫テロ・戦争に関してわかちあう
⑬環境教育基礎講座
⑭GEMSの体験プログラム
⑮自然学校で働くこと
⑯センス・オブ・ワンダー
⑰ネイチャーエクスプロアリングライトの体験と総合的な学習の時間に活かせる活動事例
⑱田んぼから生まれる日本型環境教育

【早朝 WS】 ①センス・オブ・ワンダーを楽しむ

②早朝ジョギングワークショップ

■スライドプレゼンテーション

■参加者による3分トーク「ここが変だよ！環境教育」

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2002(通算16回)

■テーマ：「胎動」

■日時：2002年11月16日(土)～18日(月)

■参加人数：182人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

■環境教育ミニレクチャー

■ヨハネスブルグ・サミット報告

■参加者による3分トーク「環境教育 次のキーワードはこれ!？」

【ワークショップ】

- ①地域通貨ってなんだらう？
②折り紙を使った環境教育の試み(3)
③幼稚園、保育園に環境教育を導入しよう
④環境問題、エコロジカルアートからの試み
⑤環境教育指導者と研究者、カリキュラム開発者のつながりを作ろう
⑥体験主義を超えて…プロジェクト・ワイルドの世界
⑦「自然の中で働く男性はオバチャン度が高い??」を証明したい!!
⑧未来へ、世界へ、感動をどうつなぐのか
⑨ひよこのキモチ
⑩モアイは何を見たか
⑪Environmental Education in English
⑫持続可能な開発と環境教育
⑬森の交響サイン計画づくり
⑭サロンの語り場

【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ

②清里ミニガイドツアーA

③清里ミニガイドツアーB

④モンゴル茶で朝を迎えよう

⑤清里ミニガイドツアーC

■スライドプレゼンテーション

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2003(通算17回)

■キーワード：持続可能な開発のための教育

■日時：2003年11月15日(土)～17日(月)

■参加人数：208人

■主催：社団法人日本環境教育フォーラム

■主管：財団法人キープ協会環境教育事業部

■協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター

■後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

【全体会】

- ・科学と環境教育をつなぐミーティング(前夜祭)の報告
- ・環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律
- ・持続可能な開発のための教育(ESD)
- ・スライド&トーク オオロニの日々

【WS&体験 PRG】

- ①ワラっていいとも
②社会教育ゲーム体験プログラム 投資意志決定ゲーム Chemical
③参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試みHAM
④総合学習へのNPO参画が期待されているけど、実現が難しいのは何故？
⑤エコ・ネイションゲーム
⑥忙しい!!! けど前向きに レベルアップシートを作ろう
⑦科学するココロを育てよう!
⑧参加型オンラインデータベースを使った「つながる」体験活動の試みPM
⑨野生生物教育の現状と課題
⑩フォーラム企業部会をリセットして、今後の方向性を考えよう!
⑪「持続可能な人」づくり
⑫開府400年! 江戸町民の循環型社会から学ぶごみ減量大作戦
⑬どうなる? どうする? 日本環境教育フォーラムの未来
⑭子育てという環境
⑮地方発! 食農発信!
⑯環境教育の中の行政の役割を考えよう!

【早朝 WS】 ①センス・オブ・ワンダー

②清里ミニガイドツアー 富士山とせせらぎの小径コース

③清里ミニガイドツアー めしの木コース

■スライドプレゼンテーション

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2004(通算 18回)

- キーワード：「持続可能な開発のための教育の10年」夜明け前
- 日時：2004年11月13日(土)～15日(月)
- 参加人数：187人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/林野庁/山梨県

【全体会】

- ・「持続可能な開発のための教育の10年」夜明け前
- ・「環境の保全のための意欲の増進及び環境教育の推進に関する法律」を考える

【WS&体験 PRG】

- ①エコツーリズムという生き方
- ②科学と環境教育
- ③地場産小麦でパンをつくろう！
- ④環境立国 エコ・ネイションゲーム
- ⑤「センス・オブ・ワンダーからグリーンコンシューマーへ」
～第1回清里「エコ商品コンテスト」～
- ⑥持続可能な地域づくりにつながるネイチャーゲーム体験
- ⑦体験学習への扉をひらく(午前の部)
- ⑧自然学校の動きと人材養成
- ⑨環境教育 in 国際協力 最前線！
- ⑩環境教育基礎講座「環境教育と自然体験」
- ⑪酵母を育て、パンを作ろう！
～酵母が教えてくれる、命、自然とのつながり～
- ⑫石器時代に接近！モノはこうして作る ～シエラカップ～
- ⑬いのちを伝える自然体験 ～自分流健康な生きかたを学ぶ～
- ⑭ボードゲーム型の環境教育プログラム
- ⑮体験学習への扉をひらく(午後の部)
- ⑯「1億円のプロデュース」

【特別ワークショップ】

パーム油のはなし ～開発教育入門講座～

【早朝 WS】

- ①早朝ジョギングワークショップ
- ②センス・オブ・ワンダーって、こんなに楽しく気持ちいい
- ③清里ミニガイドツアー めしの木コース

■スライドプレゼンテーション・5分で伝えるメッセージスライド**■JEEF 公開理事対談****(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2005(通算 19回)**

- キーワード：「自然を舞台にした環境教育は、持続可能な社会作りに具体的にどのように役に立ってきたのか」

- 日時：2005年11月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：221人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■全体会：基調講演、5分間スピーチ、パネルディスカッション**【WS&体験 PRG】**

- ①環境教育基礎講座(午前の部)
- ②自然学校って何だ？
- ③学校教育と環境教育
- ④ボードゲーム型の環境教育プログラム
- ⑤ひとりひとりの感性で自然を感じとろう
～ネイチャーゲームでのんびりぶらぶら～
- ⑥セルフガイドシートを使用した、短時間、多人数対象プログラムの検証
～セルフガイドシートの評価軸を作ろう～
- ⑦科学ってなんだろうと考えながら皆で遊ぼう！
～低学年向けの GEMS プログラムを通して～
- ⑧森林療法
- ⑨プロジェクトWE T 体験会(午前の部)
- ⑩環境教育基礎講座(午後の部)
- ⑪自然学校の評価に向けた人材養成
- ⑫小さな町村での自然学校の役割と可能性を探る
- ⑬CSR と環境教育
- ⑭おいしく食べ続けていける社会づくりは、...
- ⑮里山で音楽会

- ⑯樹木年輪から樹の声を聴く方法！ ～過去からの環境の変化を辿る～
- ⑰プロジェクトWE T 体験会(午後の部)
- ⑱科学と環境教育 見直そう！あなたのインタープリテーション
～持続可能な社会づくりに自然科学知を活かすために～

【早朝 WS】

- ①早朝ジョギングワークショップ
- ②座禅&ヨガ
- ③清里ミニガイドツアー

■スライドプレゼンテーション・5分で伝えるメッセージスライド**■JEEF 活動報告****(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2006(通算 20回)**

- 日時：2006年11月18日(土)～20日(月)
- 参加人数：224人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■全体会「日本の環境教育 この20年を振り返る」基調講演**■学長鼎談「大学と環境教育」****【WS&体験 PRG】**

- ①自然学校を事業化する ～20年間に自然学校は何を獲得したのか～
- ②団体・組織におけるリスクマネジメントを考える
- ③あなたにとって食育ってなに？
- ④環境教育基礎講座
- ⑤新型の起業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
- ⑥学びとコミュニケーション ～GEMS プログラムの体験を通して～
- ⑦ESDの実践のポイントを探る ～みんなで話せばわかってくる!?～
- ⑧森林環境教育のすすめ ～木が好きになるプログラム～
- ⑨50分プレゼンテーション(午前の部)
- ⑩企業とNPOとの協働を考える戦略会議
- ⑪環境教育とESD(持続可能な開発のための教育)の関係性を探る
- ⑫環境教育と地産づくり
- ⑬環境教育仕事塾
- ⑭行政との連携を考える
- ⑮大鼓で太古に逆行するぞ！
- ⑯木から樹を知る方法 ～木材をIPにいかす～
- ⑰セルフガイドで使えるしかけ展示のモデルをつくろう
- ⑱50分プレゼンテーション(午後の部)
- ⑲自然への感動を生み出し、ライフスタイルの転換を促す
科学的知識の伝え方

⑳感性?科学?どちらのインタープリテーションショー**【早朝 WS】**

- ①早朝ジョギングワークショップ
- ②環境質問 ～答えのない問題～
- ③ロシアからやってきた冬鳥を探してみませんか
- ④清里ミニガイドツアー
- ⑤清泉寮 朝さんぽ

■環境ショート映像作品上映会**■今後の戦略会議****■スライドプレゼンテーション****(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2007(通算 21回)**

- 日時：2007年11月17日(土)～19日(月)
- 参加人数：230人
- 主催：社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/山梨県/日本環境教育学会

■省庁プレゼンテーション**■全体会：「生物多様性」基調講演**

- ・第3次生物多様性国家戦略が目指すもの
- ・企業が取り組む生物多様性保全

【ワークショップ】

- ①「生物多様性」の見つけ方・伝え方
～自然体験活動を、生物多様性保護の教育活動に結びつける実際の方法～
- ②行政との協働を考える
- ③学ぶ環境としてのコミュニケーション ～GEMS とゴードンメソッド～

- ④食育コミュニティをつくろう!
- ⑤どこでもインタープリテーション! ~グッズ展開型 IP~
- ⑥関西発! これからは日本的でいい!
- ⑦新型の企業研修を応用したスタッフ研修ゲーム
スピード・ソリューション~自然学校版~
- ⑧企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑨ツリークライミング? 樹上の世界から学ぶこと
- ⑩50分プレゼンテーション
- ⑪企業と環境NPOとの協働を進める戦略会議
- ⑫ESDを広める人のための「ESD入門講座」
- ⑬環境教育基礎講座
- ⑭生物多様性と環境教育について
- ⑮科学と環境教育 自然体験からライフスタイルの転換へ
~ヤマネのプログラム体験を通じて~
- ⑯メディアと自然学校
- ⑰環境経営戦略ゲーム体験会
- ⑱体験型展示物を評価しよう
- ⑲エコツーリスト予備軍を探せ・つかめ・そして楽しめ!
- ⑳障害者と共に楽しみ・学ぶ森林環境教育
- ㉑やってみよう!! 体感ツリークライミング㉒の世界
- 【早朝 WS】 ①早朝ジョギングワークショップ
②センス・オブ・ワンダーを楽しむ散歩
③清里ミニガイドツアー
- 今が旬の活動事例紹介
- スライドプレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2008(通算 22 回)

- 日時: 2008 年 11 月 15 日(土)~17 日(月)
- 参加人数: 192 人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会: 「日本型環境教育の知恵 出版記念」~日本型環境教育とは~
- 【ワークショップ】

- ①科学と環境教育 ヤマネに学ぶエコロジカルな暮らし方
- ②生き物との共生について ~どんな共生があるのか~
- ③環境教育&ESD を”広げる×深める” 政策を考えよう
- ④お互いの関係を作るコミュニケーションスキル
- ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ!
- ⑥エコとエネをつなぐ環境教育を考える
- ⑦森林環境教育と Project Learning Tree
- ⑧環境教育を評価する「環境教育を棚卸しましょう」
- ⑨企業・NPO・学校の連携による環境教育を考える
- ⑩企業のための環境NPO カタログ編集会議
- ⑪どうする!《限界集落》またの名は《上流社会》
- ⑫科学と環境教育総集編 科学と環境教育の関わりを定義する
- ⑬オオバコずもうで勝つ方法! 理学系研究室の自然体験
- ⑭川遊びのルールを広めよう
- ⑮日本型、日本的を考える ~日本の自然観という視点~
- ⑯地球環境カードゲーム マイアースを遊び尽くす
- ⑰障害者と共につむく環境教育の企画をつくる!
- ⑱森づくりのための戦略会議 ~行政・企業・NPO の協働~

- 【早朝 WS】 ①砂鉄から鉄を作ろう! 柏崎の製鉄遺跡と自然のかかわり
②映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
③清里の森で生物発見
④ロシアから渡ってきた鳥と出会いましょ
⑤清里ミニガイドツアー

- 環境教育プレゼンテーション
- 今後の戦略会議
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2009(通算 23 回)

- テーマ: 「生物多様性」~環境教育の役割~
- 日時: 2009 年 11 月 14 日(土)~16 日(月)
- 参加人数: 193 人
- 主催: 社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会
 - ・基調講演「生物多様性」とは何か? 行政・企業・NGO から
 - ・事例紹介「生物多様性 私はいこう伝える」
 - ・全体ディスカッション

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座
- ②多様な生物の声を聴く~全生命の集いワークショップ~
- ③科学的な視点を活かした環境教育のプログラム作り
- ④企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える
- ⑤社会人大学院生&興味ある人集まれ! Part2
- ⑥風が吹けば罌粟が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
- ⑦パーマカルチャーと環境教育
- ⑧幼児~小2 に伝える生物多様性 ~生物多様性の形を探る~
- ⑨ビジターセンターを運営側から考え創る方法
- ⑩あなたにとって、生物多様性って何?
- ⑪生物多様性に焦点を当てたプロジェクト・ワイルド体験
- ⑫人間界に多様性は確保されているか
- ⑬日本の森林環境教育と Project Learning Tree
- ⑭どうプログラム化しよう? 自然学校の「エネルギー」
- ⑮風が吹けば罌粟が儲かる 生物多様性ゲームトライアル
- ⑯日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
- ⑰エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part2
- ⑱事故防止~注意を促すだけでいいの? 実践的予防安全法
- ⑳トランジションタウンとは何か? 都留での試み

(注) ⑦川遊びを始めよう! ~川の安全管理トレーニング~ は、都合により中止

- 【早朝 WS】 ①生物多様性を映像で感じよう ~いっしょに生きる道~
②映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
③ゼロからの火おこし術

- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

※2010 年 6 月 公益社団法人への移行認定を取得、
公益社団法人日本環境教育フォーラムへ。

(公)社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2010(通算 24 回)

- テーマ: 「いのちをつなぐ環境教育」
- 日時: 2010 年 11 月 13 日(土)~15 日(月)
- 参加人数: 177 人
- 主催: 公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管: 財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力: 山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援: 環境省/文部科学省/国土交通省/経済産業省/林野庁/
山梨県/日本環境教育学会
- 全体会
 - ・基調講演「生物多様性条約第 10 回締約国会議の結果」
 - ・提案「生物多様性保全に果たす ESD の取組について」
 - ・提案「What is CEPA??」
 - ・取組紹介「環境省における ESD の取組について」
 - ・全体ディスカッション

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座 ※
- ②日本の自然観から考える環境教育
- ③農的暮らしの学校
- ④自然感を耕す: 人は心を、畑は土を、森はデザイン感を
- ⑤生物多様性まんだらカードゲーム体験会
- ⑥生物多様性条約の CEPA って何だ?
- ⑦企業、NPO、学校の連携による環境教育を考える

- ⑧エコとエネをつなぐ環境教育を考える Part3
- ⑩「サステナビリティ」の基本はこれだ! ※
- ⑪これだけは知っておきたい! 生物多様性の基礎知識 ※
- ⑫生物多様性を普及する環境教育を目指して
- ⑬森を考える～木質バイオマスで100年先の森づくり～
- ⑭大学生のための食育プログラム
- ⑮命をいただく～ニワトリと生きる～
- ⑯エコロジカル・シンキングゲーム
- ⑰「地球交響曲第7番」を見て、みんなで語ろう!
- ⑱イナカとこどもと日本の未来を考える
- ⑲企業の行なう自然体験活動と地域のつながりを考える

※の印は、主催者企画ワークショップ

(注) ⑨海外での環境教育(保全)活動を日本でどう伝えていくかは、都合により中止

- 【早朝 WS】
- ①バードコールハイク
 - ②多様性を感じる観察会
 - ③ゼロからの火おこし術
 - ④朝飯前の手仕事
 - ⑤朝日をあびつつ、ミルクティー飲んでごあいさつ
 - ⑥生き方を学ぶ自然観察
 - ⑦ノルディックウォークで早朝散歩
 - ⑧映画「西の魔女が死んだ」 おばあちゃんのお家ツアー
 - ⑨みみをすませば～みんなで作るいのちのものがたり～

- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- JEEF(日本環境教育フォーラム)の集い
- JEEF 理事の何でも相談所

(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2011(通算 25回)

- テーマ：
「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」
- 日時：2011年11月19日(土)～21日(月)
- 参加人数：188人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／経済産業省／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会 1
・パネルディスカッション
「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育基礎講座 ※
 - ②企業・NPO・学校連携の環境教育を考える VOL. 2
 - ③質的データ分析(QDA)という手法を学ぶ
 - ④農的暮らしの自然学校
 - ⑤森林療法にできること～森林セルフケアの可能性
 - ⑥里山応援ネットワークを作ろう! ワークショップ
 - ⑦0から仕事を作る～体験からチームを作る～
 - ⑧『ワールドカフェ～自分発! 未来をかえる価値観考～』
 - ⑨修験道×環境教育～音色と歩き、体で精神性を感じる～
 - ⑩震災救援組織(RQ 市民災害救援センター)の作り方 ※
 - ⑪ESD×CSR: サステナビリティ教育指針を体感! ※
 - ⑫やったらできた! エネルギー系企業と弱小NPOのコラボ
 - ⑬環境と文化・歴史・科学 etc.の複合…「旧暦」入門
 - ⑭自然感を耕す 自分と里山里水が元気になるワーク
 - ⑮生物多様性まんだらカードゲーム 今年小学生版
 - ⑯PLT, WILD, WETの日本での可能性を考えよう
 - ⑰日本的、アジア的自然観を整理し、環境教育に活かす
 - ⑱原発と環境教育～思ったことを話すことからはじめよう～
 - ⑲狩猟×環境教育～森と野生動物と人のつきあい方～
- ※の印は主催者企画ワークショップ

- 【早朝 WS】
- ①ゼロから始める火起こし術
 - ②森林療法的プログラム体験～樹林気功と運動療法
 - ③冬鳥と出会う、いのちを感じる
 - ④キープ協会「アニマルバスウェイ」見学ツアー

- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2012(通算 26回)

- テーマ：
「アジアの一員として、日本が今できること
～think global actlocal: 『リオ+20』の年に考える～」
- 日時：2012年11月17日(土)～19日(月)
- 参加人数：177人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会
- 全体会 「アジアの一員として、日本が今できること
～think global actlocal: 『リオ+20』の年に考える～」
- ・基調講演「リオ+20の概要と、NGOの成果と課題」
 - ・パネルディスカッション
「これからの日本の復興に環境教育がどういう役割を果たすのか」

【ワークショップ】

- ①自然体験型環境教育入門講座
- ②自然学校人事担当養成講座～ほしい人材を育てよう～
- ③実施無し
- ④プーさんの森をデザインしよう!
- ⑤考えよう! 伝えよう! 森の”いのち”の知恵と力
- ⑥食から考える価値と暮らし
- ⑦ねん土をつかって、超ミニアースオープンをつくろう!
- ⑧農村と若者～そと者、若者による農山村の活性化～
- ⑨一次産業と社会貢献事業～金の切れ目が本気のはじまり
- ⑩「住み開き」を考えよう ～身近に環境教育の場をつくる～
- ⑪「都市と自然の融合 ～両方見て、初めて見える環境教育!～」
- ⑫木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及をめざして～①
- ⑬地域に根ざすということについて PBE への招待
- ⑭田舎で生きる! ライフモデル作りワークショップ
- ⑮パタゴニアから学ぶ! 持続可能な働き方と歩み方
- ⑯環境教育×植物療法～自然の恵みをヒトの力に～
- ⑰都市型環境教育 小学生向け紫外線プログラム体験
- ⑱文学から見た農的暮らしの可能性
- ⑲理想のシゴト? 自然学校職員の本音と未来像
- ⑳身近な環境の総合的「明察」…内なる「マイ暦」を作ろう!
- ㉑農が X を助け、X が農を助ける～半農半 NPO でいこう～
- ㉒エコとエネのつながりを考えるカードゲームワークショップ
- ㉓森で教える国語・算数・理科・社会をつくっちゃおう!
- ㉔木質バイオマスを首相官邸へ～さらなる普及へ向けて～②

【早朝 WS】

- ①科学と環境教育プログラム「静岡のなりたち」
- ②みどりとともにだちに! 泥んこ遊び de 苔玉作り
- ③キープ協会「アニマルバスウェイ」見学ツアー

- 環境教育プレゼンテーション
- 当日募集ワークショップ
- 人と組織の紹介処

(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2013(通算 27回)

- 日時：2013年11月16日(土)～18日(月)
- 参加人数：204人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／国土交通省／経済産業省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会

■全体会

- ・キーンノートスピーチ
- ・ワールドカフェ方式ディスカッション
- ・「環境教育に関わる諸団体から最新のメッセージを聞く」

【ワークショップ】

- ①自分の仕事を創る技術～IPの新しい可能性を考える～
- ②地域に根ざした環境教育 Place-Based Education
- ③モミでご飯をたこう！～空き缶で「ミニかまど」づくり～
- ④宇宙船地球号体感インプリ：20世紀天文少年の誘い
- ⑤環境教育をカードゲームで考えてみよう～エネルギー編
- ⑥「原発事故のはなし3」デモとディスカッション
- ⑦質的データ分析(QDA)を体験してみよう
- ⑧企業とNGOの幸せな関係をながーく続ける秘訣
- ⑨楽器を使ったプレゼンテーションを考えよう
- ⑩知っておきたい基礎知識～命・自然・地球・宇宙～
- ⑪日常の現場や暮らしに持ち帰る“運営と振り返り”
- ⑫持続可能な地域のための必要なしきみを考えよう
- ⑬継承したい日本の自然観～自然体という生き方～
- ⑭事例から学ぶESD(持続発展教育)の基本と実践
- ⑮ゲームで生態系を学ぼう！
- ⑯ウィルダネスファーストエイド～仲間を守るその技術～
- ⑰パフォーマンス評価の世界の潮流
- ⑱15年のノウハウ伝授！身近な素材でプログラムづくり
- ⑲小学校で環境教育やりたい人 集まれ！
- ⑳伝える技術 KP法(紙芝居プレゼンテーション法)

【早朝WS】

- ①アイソン彗星いつ観るか…清里、澄んだ空…今でしょ！
- ②ロシアからの旅人に会おう
- ③清里トレラン

【特別企画】

- ・アクアマリンふくしま移動水族館

【自主企画】

- ・プレゼンテーションで世界を変える！～TEDの世界～
- ・野外フェスは環境教育のツールになりえるか！？
- ・スマホ、テレビゲームの年齢制限でも考えてみよう
- ・JEEF 理事バンド(バンド演奏)

■10分プレゼンテーション

■当日募集ワークショップ

■人と組織の紹介処

【ワークショップ】

- ①自然の中で遊ぶゲーム
- ②再び、地域に根ざした環境教育(PBE)について
- ③企業のESDのあり姿あるべき姿を考えよう
- ④「協働」による里山再生の取り組み～○○×○○～
- ⑤エネルギー大臣になろう～ゲームで考える環境教育～
- ⑥ウィルダネスファーストエイド～仲間を守るその技術
- ⑦楽器を使ってプレゼンテーションしよう
- ⑧語ろう！考えよう！「企業のESD宣言」
- ⑨電子絵本を活用したESDプログラムを考える
- ⑩国連の新目標(SDGs)は環境教育普及につながる？
- ⑪体感、出航！宇宙船地球丸「苦手は天文」ぶっ飛ばせ
- ⑫“自然学校と林業”環境教育は暮らし生業に直結せよ！
- ⑬イノベーション創発型ワークショップのデザインを学ぶ
- ⑭清泉寺で自然音楽野外フェスティバルをつくる
- ⑮教育と刃物～ナイフを使う喜びを子どもたちに！
- ⑯シニア自然大学を作ろう
- ⑰自己肯定感を育むESD～これからの学びへの提案～
- ⑱GEMSの新しい使い方～森の中で図書館の片隅で～
- ⑲KP法(紙芝居プレゼンテーション法)の工夫共有ワークショップ
- ⑳小学校で環境教育をやるう！Part II

【早朝WS】

- ①朝の楽しい修行：ヨガと勤行
- ②環境教育と持続可能な開発の日米比較研究中間報告②
- ③エンカウンターグループ「今ここ」
- ④清里朝散歩

■10分プレゼンテーション

■当日募集ワークショップ

■人と組織の紹介処

(公社)日本環境教育フォーラム 清里ミーティング 2014(通算 28回)

- テーマ：「ESDの10年後の環境教育」
- 日時：2014年11月15日(土)～17日(月)
- 参加人数：186人
- 主催：公益社団法人日本環境教育フォーラム
- 主管：公益財団法人キープ協会環境教育事業部
- 協力：山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンター
- 後援：環境省／文部科学省／林野庁／山梨県／日本環境教育学会

■全体会

- ・キーンノートスピーチ
- ・基調報告 テーマ【ESD ユネスコ世界会議を終えて】
- ・ワールドカフェ方式ディスカッション【私とESD】

1 日目

開会式・全体会 1

開会式 司 会：(公社)日本環境教育フォーラム 理事長 川嶋 直
主催者挨拶：(公社)日本環境教育フォーラム 会長 岡田 康彦

全体会 1

第 1 部 キーノートスピーチ

テーマ：「**農的生活学校**」の学び方

ファシリテーター：高田 研（都留文科大学）

スピーカー 1.：加藤 大吾（NPO法人都留環境フォーラム）

スピーカー 2.：佐々木 豊志（(一社)くりこま高原自然学校）

スピーカー 3.：高野 孝子（NPO法人ECOPLUS）

第 2 部 ワールドカフェ方式・ディスカッション

テーマ：「**地域をつなぐ環境教育**」

（敬称略）

開会式

主催者挨拶

(公社) 日本環境教育フォーラム会長 岡田 康彦

主催者を代表し、公益社団法人日本環境教育フォーラム会長の岡田康彦より挨拶を行った。

始めに、今回も多くの方にご参加いただいたことへの感謝を述べた。

毎年過半数の方が初参加だが、今年は 2~4 回目の参加という方が増えた。初参加も歓迎したい一方、経験者にも再び参加していただきたいので、良い傾向だと思っている。「清里ミーティングを10倍楽しむためのガイドブック」に、『自分の目的を明確にして参加すること』と書いてある。しかし同じ目的をもっている人を探すのは意外と難しい。そこで、5 回以上参加の方に積極的にアタックしてもらいたい。なぜなら、環境問題や環境教育は実は入口がたくさんあるが、それぞれ取り組んでいくとどこかで壁にぶつかっていくことが多く、長年このミーティングに参加している方は、すでに様々な分野への対応力を持っている。そのため、自分の目的に合う人がいないと思う必要は全然なく、参加回数の多い人に話しかけてみれば、期待するような答えやアドバイスを得られる可能性が高い。ぜひコミュニケーションを取る努力をしていただき、有意義な 3 日間を過ごしていただきたいと述べた。



1 日目 全体会 1

第 1 部 キーノートスピーチ テーマ 「農的生活学校」の学び方

清里ミーティング 2015 のテーマは「地域をつくる環境教育」。各地域で実践されている環境教育の中でも、近年話題に上る機会が多い「農的生活学校」について、言葉の定義や全体像を高田氏より説明して頂いた。その後、実際に活動されている 3 人のゲストより各 15 分のスピーチをいただき、今回のテーマである地域の環境教育につながる話題提供とした。

<ファシリテーター> 高田 研 氏(都留文科大学) 「農的生活学校」の全体像

「農的生活学校」とは、松本大学教授の中澤朋代さん、くりこま高原自然学校の佐々木豊志さんと私とで作った造語である。

定義は、「農を実践しながら、暮らしそのものを学びの場としていること」である。

1987 年に初回の清里フォーラムを開催し、私たちは自然学校を中心に据えながら活動を展開してきた。1992 年に「日本型環境教育の提案」を小学館から出版し、日本環境教育フォーラムが任意団体として発足した。1996 年には自然学校宣言があり、具体的な動きに移ってきている。

「自然学校」も造語だが、今では定着している。野外教育、自然保護教育、環境教育に携わる人たちで、自然学校を研究したり実践したりしてきたが、その箱に入らない実践も出てきた。それは、防災や農業、食の分野である。さらには、毎日の生活のあり方、ライフスタイルをベースに置いた自然学校が生まれてきた。私たちと一緒にの分野ではないという感覚がある一方、多様な領域の人が関わってくるのが見えてきた。

そこではどんな方が実践しているのか見てみると、まずは、野外教育＝自然学校の人たちである。この後に登壇する加藤大吾さん(NPO 法人都留環境フォーラム)はこのルーツである。元々は、NPO 法人国際自然大学の職員で、現在は家族で小さな自然学校をされている。佐々木豊志さん((一社)くりこま高原自然学校)も同じで、アウトドアからインドアに移っていくという流れがある。

もう一つは、ヒッピーからの流れである。ヒッピーとは、1960 年代アメリカの自然志向を中心とした運動である。また、1950 年代にもビートニックという若者たちの文化があり、それらを発端として農のライフスタイルを受け継ごうという動きが出てきた。彼らは、グラウンディングと言っているが、自分の大地を見つけてそこに住み、新たな生活をするという運動をしていて、新しいものを次の世代に受け継いでいこうとしている。

また、自然農・パーマカルチャー・エコビレッジという大きな流れもある。例えば、スコットランドにあるフィンドフォーンがある。また、オーストラリアのクリスタルウォーターズで行われている、農を中心とした持続可能な社会などもある。しかし、これも調べると、実践家の方々の多くは野外教育の分野から入ってきている。



少し違う系統では、以前から実施されていたユートピアを目指す運動もある。日本で有名なのは、武者小路実篤の「新しき村」というものがある。自然学校とはあまり関わりがないが、道徳的なところから出発している。また、マクロビオティックなど食の運動をされている方もいる。「農的生活学校」は、ほぼこのようなルーツで取り組まれていて、日本環境教育フォーラムが取り組んでいた範囲からは少し離れた方々も実践されている、ということで全体像をご理解いただけたらと思う。

キーノートスピーチ 1

加藤 大吾 氏(NPO法人都留環境フォーラム)

10年前、東京から都留市に引っ越した。農のある暮らしに学びがあると思ひ、まずは私の暮らしを紹介したい。

7年前、10年間使われなかった田んぼを開拓したところ、見事にお米が実った。畑では、パーマカルチャーの考えをもとに、約20種類の野菜を作っている。ほとんどの食べ物を自分で作れるようになったと感じている。雪が多いときは、時々買ったりもらったりしている。

鶏の世話係は娘の役目。朝、卵を採って「かとうさんちの自然卵」という名前で販売している。1個40円で、ひと月に数百個販売している。すると、私のお小遣いよりも、彼女のお小遣いの方が多くなる。どうしても買わなければいけない餌は売上から娘が買い、自分で配合してあげている。

6年前、鶏が卵を孵すようになった。ヒヨコが大きくなり、また卵や肉が取れるようになる。私の生活にとっては1つの転機だった。お客さんが来たときにさばいたり、そういう体験として命をいただいたりするプログラムも行っている。食べる鶏の順番も娘が決める。「あの子が最近卵を生んでいないからあの子にしよう」と。血統を整えることで、自分好みの家畜を作ることができる。

ある日、魚を捕まえて食べた。さばいたところ胃の中からサワガニが出て来た。魚がサワガニを食べるなんて図鑑に書いていない、と娘が怒っていた。また、地元のおじいちゃんが畏にかかった猪を譲ってくれることもあり、肉におろす作業も長女が行っている。

3歳と6歳の息子が、最近薪割りを手伝ってくれるようになった。彼らに火をつけておいてと言うと、勝手に火起こしをしてくれる。家内は大根を2歳頃から切らせている。自分の指も時々切ることがあるが放っておいて自分でやらせるようにしている。それでも、成果として、ちゃんと指も付いているし、火も炊くこともできる。ナイフやオノも使える子どもになった。

また、麦も作っており、収穫して乾燥させたものを粉引き機にかける。卵を入れてパンケーキを焼くと昼食になる。小麦は麺に変わることもある。大豆も作っていて、豆乳や豆腐になる。その際、大豆の殻を捨てずに取っておくと、殻や藁が大好きな羊が、私たちがエネルギーとして取り込めないものを食べ吸収してくれる。そして、子羊が生まれ、大きいお肉を手に入れられるチャンスがくる。ミルクも取れるし、羊の毛からセーターを編みたいも思っている。

種を超えて羊、鶏、牧羊犬、人間と一緒に戯れているシーンが幸せだと感じている。羊小屋の床を見てみると、うんちやおしっこをバクテリアが分解し、発酵し土になることが分かる。そしてこの土を畑に還す。それが先程のお米や野菜につながっていることに気づいた。

かくして、私は肩書きを「ピースフルライフワーカー」とした。実践者であることを大事にしたいと思っている。幼少のころ奥多摩に4年間住んだ。それ以外は都会に住み、歌舞伎町で自転車に乗って遊んでいた子どもだった。しかし、10年前に引っ越し、暮らしが変わった。

自分で森を開拓して建築して就農し、全部手作りで暮らしている。5年前には環境教育のNPOを立ち上げた。また、自分の暮らしについて、本を書いた。独りよがりではなく、いろんなところに影響を与えたいと思っているからだ。

1冊目は田んぼを始めるまでの物語。NPOの運営のことも書いている。2冊目は、生態系や森の中で家族で暮らしてみたら何が起こったのか、誰も発信していないと思って書いた。



家族は妻と子ども4人。田んぼ・畑合わせて2反、穀物については、ほぼ自給している。鶏40羽、羊3頭、馬1頭、犬2頭。家族の恒例行事は、3日間で100kmを歩く旅をしている。ヒグマが棲む湖のほとりにテントを立てて泊まることもあれば、うって変わってリゾートホテルに泊まることもある。

私の暮らしは、地球の仕組みを活かしていると思っている。人間が食べるものは完璧なお米の粒。半分になったものや私たちが食べられない藁や殻は家畜が食べ、それが糞尿となり、さらには虫が食べる。すべてのものが肥料となって循環する。循環を止めるのは農薬を撒くのが早い。菌は死ぬし、虫も死ぬ。

自分の中で、“暮らし感”が高まる瞬間は大きく2つ挙げられる。

1つは、生産と消費のバランスを感じているとき。消費ばかりだと暮らし感がない。

2つ目は、命を感じているとき。家畜を飼っているし、人間のケガや病気もある。自然を感じているときも同じである。

また、地域へ与えた影響として、近所のおじいさんのエピソードを紹介したい。

1年目、田んぼの石を取っていたら「農業ってどんだけ儲かるんだい」と言ってきた。翌年、「俺もやりたいから種もみ分けてくれ」と言ってきた。さらに翌年、「農業っていうのは金勘定しちやいかな。金なんか儲かるわけない」と言って、その翌年は「これは道楽だ。金のことは考えちやいけな、糖尿も高血圧も治っちゃったよ」と。今では「農業に出会わせてくれてありがとう、あのままだったら糖尿で死んでいたかもしれない」と言ってくれた。これは地域への最大の貢献だと、私は思っている。

なぜ農のある暮らしなのか。体験から日常に変化をもたらすことができると思ったからである。暮らし方、生き方を変えるのは難しいが、そこにつながる入口が、たくさん接続できることが特徴だと感じた。消費を変えることは簡単だが、暮らしや生き方、働き方に変化をもたらすプログラムはあまりない。

人間性を充実させ、変化をもたらすようなこと、個人や社会に対して変化をもたらすところに、意図的にプログラムを展開することも必要だと思っている。

キーノートスピーチ2

佐々木 豊志 氏(一社)くりこま高原自然学校)

宮城県北部の栗駒山の山腹で、くりこま高原自然学校を20年やっている。私自身は野外教育、冒険教育が専門である。1996年に自然学校宣言があり、その年に始めた。

きっかけは、当時の清里ミーティングに参加し「自分も自然学校をやる」と勢いで言ったことであった。

今日のテーマは「農的生活学校」であるが、私の場合は、農的なものからは入っていない。冒険教育が中心なので、北上川を200km下ったり、山に入ってしばらく出て来なかったり、沢登りをしたりということがメインだった。今は自然学校から派生し、エネルギーや森林資源の活用など様々なことに取り組んでいる。

東日本大震災もそうだが、さらにその2年半前、2008年に岩手・宮城内陸地震が起り、くりこま高原自然学校が被災してしまった。2年間避難指示があり、事業ができず山を下りた。スタッフも仮設住宅に入ることになった。ここ7、8年は災害に苛まれている。

自然学校の使命は、持続可能な暮らしを考え平和で豊かな暮らしを創造できる野外教育であると考えている。人づくりと共に、社会の仕組みも変えなければいけないということで、20年前にやると決めた。

自然学校がある場所は、栗駒山の標高600mの開拓地である。ブナの原生林を、戦後満州から引き揚げた方たちが開拓した歴史がある。一般道から開拓地までをつなげた開拓道路は、全国で一番長いと地元の方が言っていた。それだけ奥にいるということである。

以前は家が130軒ほどあったが、今は30軒もない。20年前、私が自然学校を建てたとき、地元の人に「栗駒の自然はいいですね」と言うと「そんなに自然がいいなら冬に住んでみろ」と言われた。当時、冬は2m以上雪が積もって何もできない地域だった。昔は、夏の限られた時間に森を切り開いて炭を焼き、原木のキノコ栽培を行った。その後は、大根やイチゴの栽培を行った。イチゴは、山の上で涼しいので、下と時期をずらして出荷する。当時は、1パック5,000円もの値がついた。そのように工夫をしながら、生き延びてきた。そのため、地元の人々は、ただ自然が良い所とは思っていない。その分厳しさも兼ね備えているからだ。冬は出稼ぎに行き、夏は限られた資源で森を切り開いてきた。

私は、教育の視点でフィールドを見ていたので、とても良い自然だと思ったが、実は全然違っていた。栗駒の自然を整理すると、教育、遊び、観光、療育の場になる。

地域民にとっては、私が思い描いていた場ではなく、そこでどうやって暮らすか、どうやって食べて行くかという、生産の場、暮らしの場であった。人々がそのように脈々と暮らしていくことは文化や風土の場であり、交流の場でもある。いろいろな切り口で栗駒の場を見られると思う。

自然学校の活動は2つの視点がある。

まずは、私が専門でやっていた野外教育や冒険教育の視点。これは非日常、つまり“ハレ”のプログラムである。

それに対して、「農的生活学校」は日々の暮らしの視点。それは、日常、つまり“ケ”のプログラムである。

そのどちらも、“創造的”で“想像的”なことを大事にしている。そして、課題を解決していくという、教育的な視点が入っているので、“ハレ”のプログラムも、“ケ”のプログラムも求めている土台は一緒であると言える。



ただし、“ハレ”のプログラムは短期間で記憶に残り、琴線に触れる体験がある一方、“ケ”のプログラムは、コツコツと継続して得られる体験という部分が違うと思っている。いずれにせよ、私は「生きる力を育むためのプログラム」として実践している。

私は冒険教育、野外教育を実施しているので、自然学校を始めた当初は、農のある暮らしというチャンネルではなかった。

活動としては、雪を資源として使った、雪の自然体験やイグルー作りや、森のようちえんの活動、ネイチャーガイドや人材育成の事業もやってきている。

では、なぜ農的な暮らしに入ってきたかを説明したい。

1996年、中央教育審議会で、体験から育まれる「生きる力」が大事だということになった。当時の文部科学省が、社会体験、生活体験、自然体験を推進し、長期キャンプをやるかと提案し、その時に私も手を挙げた。すると、不登校の子を抱えているお母さんが、2週間という長いキャンプに行けば、それをきっかけに変わるのではと相談にきた。そのお子さんは、キャンプでの生活を通して変化して帰っていった。

そこから、不登校の子を受け入れるための寮を作った。そうしていくうちに、積極的にこの自然の中に住みたいという方も現れ、山村留学も開始した。子どもだけでなく、20代30代でつまづいて会社に行けなくなった、という大人も来るようになった。そういう人たちを受け入れて一緒に暮らすというところから、非日常の体験だけでなく、日常の体験に入っていく。食べものも畑で作るようになった。見よう見まねで、完全無農薬栽培をしている。そして、鶏や家畜も飼い、暮らしが始まった。畑の他に、山菜を採ったり、パンを焼いたり、石窯を作ったりもした。田んぼも借りて、アイガモ農法をやり鶏肉として食べた。ウサギやヤギの他、かつては馬も飼育していた。

ここでは、悩みを抱えている人たちと一緒に暮らしをつくるということ、彼らを支援する教育的な手法として使っている。

最近では経営状況をよく聞かれる。お金というとグローバルな流れをイメージすると思うが、地方では、グローバルなお金だけではなく関係性が生まれてくる。それで最近、ソーシャルキャピタルという言葉に興味を持つようになった。そんなことを考えながら、今もこの自然学校を運営している。

キーノートスピーチ3

高野 孝子 氏(NPO法人ECOPLUS)

私は、新潟県南魚沼市という中山間地域の農村部に住んでいる。私の原体験は、オーストラリアで3カ月、いろんな人と暮らしながら活動する国際プログラムに参加したことであった。

思えば当時より、常に暮らしの中から学ぶ姿勢があったと思っている。未来をどうつくっていくか、未来をデザインする人をどうつくっていくか。生きとし生けるもの、人間が認識することのない意識、動物も人間も含めた、総合的な目線みたいなものが大事だと思っている。

暮らしから学ぶことが、どうして大切かに至るまでの背景として、私はこれまで多くの世界を旅してきた。ビバークやテント泊をし、そこに暮らす人々や動物と出会ってきた。自然と近い暮らしをしている少数民族には、多くのことを教えてもらった。大地と生きる暮らしを経験していくことの大切さを、旅をしながら痛切に感じた。何よりも、豊かさや幸せという本質的な事を考えたと同時に、私は一体何者なのか、どんな考えをもってどんな風に人や生きものに関わるのか、問われることを特に感じた。旅を通し、今の時代で恩恵を受けている人は実はほんの一握りであることもわかった。

世界では、紛争や飢餓、貧困、環境破壊に伴う問題が起きている。日本でももちろん、災害が起きて、今まで積み上げてきた暮らしがなくなる、といったことがいつでも起こり得る。

いろいろな課題が地球にはある。特に日本に目を向けると、人が自然と共に暮らすという体験がなく、あまりにも生命感や生きるということから、普段の意識が離れがちな環境に生きている。それが様々な課題につながっていると考えている。

私たちが何をやるかが、人類の文明に大きく関わる時代になっている。だからこそ、今、未来に関わる人たちをつくっていくことが大切だと思っている。そのためには、視野を広く持たなければいけない。世界で何が起きているのか、想像する力を持たなくてはならない。例えば、エコロジカルフットプリントという図がある。それは、どれだけ負荷をかけて人が生きているかを、国ごとに表したものである。それを見ると、日本はこんなに小さな国なのに、地球にすごく大きな負荷をかけて暮らしをしていて、一方で、アフリカは負荷が非常に小さい暮らしをしている。

私が住んでいる地域で、ある人がこんなことを言っていた。「子どもが減っている。小学校も統廃合してなくなっていく。なんとかできないか」。

これがきっかけで、田んぼの事業を始めた。この地域は皆、農に関わっている。農業で暮らしている人は少ないが、農的な暮らしがある。山菜を採ったり、きのこを育てたり、どこに行けばどんな葉っぱがあって、どんな風に作ったらコップになるとか、代々伝わっている知恵があって、それを分けてもらいながら、いろんなことを考える。

そもそもは、小学校がなくなるというのがきっかけだったが、それよりも広く捉えて、農山村の価値を地域内外の人たちと一緒に問い直したい。なぜなら、そこに多くの知恵があるからである。しかし、それはおそらく人と共に無くなってしまうものでもある。今、本当にそれを無くしていくのかを、一緒に考えていきたいと思っている。



まずは、自分たちが暮らしているところに、どんな生きものがいるのかを知ることから始めてみる。100mくらいを1時間かけて発見しながら歩くと、村の人がどんどん変わっていく。伝統知を活かし、生きることや豊かさとは何だろうか、自分のライフスタイルを見直すことを学ばせてもらっている。外から来る人たちに対して、最初は苦虫を噛み潰したような表情だった地元の人たちが、変わっていく。たくさんの人に素敵な場所だと言われ、そうかもしれないと思うようになってきている。だから、自分の住んでいる地域に誇りを持つ、愛着を持つ、希望を持つことが、一番大事なことではないか。田んぼで手間ひまをかけて米が育つ。私たちがここに生きているのは、私たちよりもずっと前の人たちが何百年、何千年も米を手で作って来てくれたから。米を育てるのがどんなことなのか、米を育てることを学ぶというよりは、自分の命がどうやって支えられているのかを知ることにつながる。

私たちは、この村で営まれている暮らしの一部にお邪魔し、そこから学んでいる。日本では人と自然のことを考えるには、信仰や宗教や山神様などが欠かせない。そういうことも一緒に体験しながら理解を深めていく。これは世界に出るうえでとても大事なことです。

このような活動を通して何が得られるのか。まずは自分を知ること。その地を知ること。命にふれる価値観を問うこと。本当に大事なことは何だろうか問う。そして課題を知る。それに向かって自分は何ができるだろうと問う。そして実際に動く。そういう人を育てる、そういう力になるために、自分や自然に働きかける暮らし、暮らしから学ぶことが大事なのでは、と思って活動をしている。

第2部 ワールドカフェ方式・ディスカッション

この時間は、参加者同士の情報交換の場と位置づけ、全体会1第1部『農的生活学校』の学び方に関する3人のゲストのスピーチを受けて、「地域をつなぐ環境教育」というテーマでワールドカフェを行った。

ワールドカフェとは、参加者が少人数に分かれたテーブルで自由に対話を行い、何度か他のテーブルとメンバーをシャッフルしながら話し合いを発展させていく方法である。

今回は5〜7名で1つの“えんたくん”（段ボールの円形テーブル）を囲み、話し合いを行った。ワールドカフェのルールは3つ、「よく聴こう」「短く話そう」「言葉を書き留めよう」。初めにそのルールを記入用紙の中央に書き込み、グループ全員が意識できるようにした。そして講演を聞いて感じたこと、考えたこと、疑問に思ったことをキーワードで書き出し、簡単な自己紹介の後、全員が順番に発表した。

今回は、1ラウンド13分とし、3ラウンド行った。席を離れる際には、各テーブルを管理するテーブルマスターのみを残し、他のメンバーは別のテーブルへ移動する。その際メンバーがバラバラになるように動き、できるだけ多くの人と話し合いができるようにした。テーブルマスターは、新しく着席した人に2〜3分でそれまでの対話内容を伝え、同じ手順でディスカッションをしていく。3ラウンド終わった後は全員最初のテーブルへ戻り、他のテーブルでどのような話し合いが行われたか、自分が新しく感じたことや考えたことなどを共有した。

全体会の静かな雰囲気からは一転し、会場は熱気に包まれた。身振り手振りを交えて話ったり、隣の人と会話を弾ませたり、傾きながら一生懸命耳を傾けたりする様子が見られた。心に残った言葉や頭の中のイメージがどんどん書き足され、文字だけでなく矢印や吹き出しでも装飾されていた。このあと記入用紙は壁に貼り出され、参加者の方々は他のテーブルの意見を熱心に眺めていた。



2 目目

3 時間ワークショップ

【午前の部】

1. 広範囲に拡散した外来種の市民による調査と駆除対策
2. 獣害問題は、環境教育の対象になるのか？
3. エネルギー大臣になろう！～ゲームで考える環境教育～
4. ご当地 GEMS ～地域に根差したアクティブ・ラーニング～
5. 自然学校の 30 年を振り返りこれからの 20 年を考える
6. 環境教育の基礎…自然とは？命とは？
7. 「PBE:地域に根ざした学び」を考える
8. 「若者が地域で生きる・暮らす」を考える 3 時間
9. 里山ってなんだろう ～その意味、価値を考える～

【午後の部】

10. 野生生物と共生する環境地域づくりの進め方
11. 持続可能な未来のための科学技術とのつきあい方
12. サステイナブル・ツーリズム国際基準を自然学校に！
13. 体感出航！宇宙船地球丸。「天文は苦手」吹っ飛ばせ
14. 探そう磨こう！環境教育の魅力を伝えるコトバ
15. 野外フェスに環境教育を広げる『NATCU FES』
16. 地域が蘇る“森林資源を循環させる経済”を考える
17. 廃校利用の自然学校の経営
18. ビギナーのための自然体験型環境教育プログラム

広範囲に拡散した外来種の市民による調査と駆除対策

実施者：渋谷 晃太郎(岩手県立大学/教員)

【概要】

岩手県滝沢市の市民による外来種オオハンゴンソウの調査と駆除を切り口に、日本国内における外来種の現状・外来種に対する人々の意識調査・なぜ市民参加型なのか・本事例の具体的な概要と取り組み・関連する諸問題・外来種との向き合い方について、ブレインストーミングとディスカッションを実施した。

【実施内容】

1) 実施者挨拶と全体の概要説明、アイスブレイク

実施者の自己紹介と流れの説明。参加者の自己紹介と本ワークショップへの参加理由、意気込みを共有した。

2) そもそもなぜ今、外来種なのか？

国内における外来種拡大の実態。身近なオオハンゴンソウを例に考える。

3) 今回の調査における市民参加型の理由

- ①市民への関心を高めるため。
- ②外来種は生物多様性の第3の危機であるが、第1、2、4の危機と複合した問題へと発展している。
- ③極めて広範囲に拡大しており、対策には行政だけでは無理。多くの市民の協力が必要である。

4) 本ワークショップを通して共有・話したいこと

外来生物は、そもそも人が運び込んだもの。人も生態系の一員だとすると、果たして駆除する必要があるのか？

→外来植物をそのまま除去するのか？(除草剤などの薬品で)

また動物の場合は命を奪うことになる。必ずしも食べることはない。これまでの環境教育では食料を得るために命をいただくと教えてきたが……新たな考え方が必要になるのでは？その賛否を話し合うという目的の共有。

5) 外来種に対する意識調査結果の開示と自治体の動き

日本全国と滝沢市民の意識調査を比較。認知度は全国レベルで低い、オオハンゴンソウについては比較的よく知っていた。滝沢市ではいきもの探偵隊という団体が発足し、オオハンゴンソウの調査を実施。その結果を回覧板で市民に還元し、各シンポジウムなどを開催して普及啓発を行っている。

6) 調査の実施方法紹介と取り組み

スマートフォンを用いた調査法の紹介。GPS 機能やカメラを活用し市民の活動をマップに落とし込むことで、オオハンゴンソウの生育場所を把握する。それに基づき市民向けの駆除マニュアル配布や除去事業を実施。また最近では SNS を通じて実施している取り組みや活動成果の発信を行っている。

7) ウシガエルを例に事例紹介(外来種の新たな生態系)

戦後の食糧難の時期には、ウシガエルは貴重な食糧であり、必ずしも害悪ではなかった。また除去を進めるうえで、外来種が既に築いてしまった新たな生態系に注意しなければならない。ウ

シガエルが多く生息する池では、ツチガエルの数が減少する傾向にある一方で、外来種のコイが生息する池では、ウシガエルの数が減り、ツチガエルが維持されるというデータがある。

8) ブレインストーミング、ディスカッションにて意見交換

・外来種は駆除すべきか？

人に直接影響のある生物については理解が得やすいが、生態系への影響はわからないことも多く、市民に説明が難しい。

・広がってしまった外来種をどうすべきか？

オオキンケイギクなどは、綺麗なため新たな景観を形成しており、それでもいいのではという市民もいる。市民への環境教育が重要だが、現状では理解を得るための材料が少なく、なかなか腑に落ちる説明ができない。拡大してしまった外来種の対策は、もう諦めるという選択肢もあるが、諦めないのであれば、多くの市民の協力が不可欠。また簡便な方法として、除草剤の使用も検討する必要があるが、十分な議論が行われていない。

・法律指定種の範囲を超えるべきか？

世界的な外来種については地域の特性などを踏まえて対応を考える必要がある。国内移入種も同様。

・殺処分についての議論

植物への可愛い・綺麗論、動物へのかわいそう論にどう対応していくべきか。共通理解のための指針が必要。

【まとめ】

滝沢市の事例によって外来種の拡大・早急な対応が求められているという現状を再確認できた。一方で、事態の複雑さ(新たな生態系が構築されている、可愛い・綺麗だからといった感情レベルでの認識差、カブトムシ等の小売店販売、無責任な外来種ペットの放流)も実感する結果となり、今後は市民などの個人個人の働きが重要であるが、依然として国や行政機関等の協力や支援活動が不可欠であるという結論に至った。外来生物対策には環境教育の役割が重要だが、これまでこの問題を避けてきたのではない。環境倫理的、保全生態学的、景観論など様々な分野からの意見を聞き、方向性を出す時期だと考えられる。



獣害問題は、環境教育の対象になるのか？

実施者：小玉 敏也(麻布大学/教員)・浅岡 永理(麻布大学)

【概要】

獣害問題は、一般に「猟師の育成」「駆除する」「食肉化する」等のテーマで語られることが多い。しかし、今回はこの獣害問題を環境教育の教材として扱うことに焦点を当て、その価値と実践例について共有を行った。また、農山村を活性化させる獣害問題を用いた環境教育プログラムをグループで作成し、発表と意見交換を行った。ワークショップを通して、獣害問題を環境教育に取り入れる可能性について、参加者全員で考えた。

【実施内容】

1) 自己紹介、クイズ、ワークショップの背景の紹介

自己紹介では「名前」「所属(普段の活動)」「このワークショップに参加した理由(獣害に関して)」を共有した。様々な職種の方々が獣害について関心や問題意識を持っていることが分かった。また、アイスブレイクとして獣害に関するクイズを解いた。今回のワークショップの背景には、動物と人間との関係性の変化について問題意識があったところから出発している、と共有された。

2) いのちの授業(鳥山 敏子の実践例)

問題に取り組んでいる例として、鳥山敏子(1985)の「いのちに触れる授業」といった教育実践を紹介。鳥山敏子は「にわとりを殺して食べる」といういのちの授業を行った方である。小学校4年生を対象に教師、保護者、児童合わせて約90名以上を募って多摩川の河川敷で行った。授業内容は農家による「にわとりのしめ方」の講義と子どもによる「21羽のにわとりの屠殺と見学」などである。当時の児童の反応は、「涙が止まらなかった」「残酷で殺すことが嫌になった」「食べたなら美味しかった」などの意見が出たようだ。鳥山の授業観から、次のような言葉を選んで参加者に共有した。「自分の手ではっきりと他の命を奪い、それを口にしたことがないということが、本当の命の尊さをわかりにくくしているのだ。」「いのちを『食べ物との関係』の中で、食べ物を『空気・水・土との関係』の中で捉えることをしっかり掴めば、なぜ、空気や水や土に毒を入れたらいけないかがわかるだろう。」

3) 命の授業(小玉の実践例)

このような鳥山敏子のいのちの授業に影響を受けて、実施者は自身の勤める大学で同様にいのちの授業を行った。山の中に畏をばり、捕れたイノシシを解体して食べる。獣害問題として頻繁に名前が挙がるイノシシやシカを、駆除するだけでなく、環境教育、そして、いのちの授業の教材として扱った。この授業を受けた学生の反応としては「動物を食べることが命を奪ったことに対しての唯一の『責任』の取り方だと感じた」「死の現場を目の前で見て、とても怖かった」「経験して良かった」など様々な意見が出た。このような実践例を受け、獣害問題を環境教育の題材としてみると、非常に深い学びを与えてくれるものと情報提供した。

4) 環境教育×獣害問題

前半はワークショップの始めに行った獣害問題に対するクイズの答え合わせを行った。次に現在の獣害に関する被害状況、国や地方自治体の駆除や対策がどのようなものであるかなどを共有した。それ以外にも獣害問題に取り組んでいる団体は多くある。その中でも、獣害問題を環境教育として位置づけ、獣害について知ってもらい、または取り組みを通して獣害被害を減少させようとしている団体をピックアップし、情報を共有した。特に自然学校や企業、NPOなどの活動が報告された。

このような活動を受けて、獣害問題は決して里山だけの問題ではなく、都市部の人にも大いに関係があることだとして、問題提起を行った。

5) 環境教育プログラム作りWS

「環境教育を用いて誰でも獣害対策に関われるプログラム作り」をグループで考え、発表した。「獣の気持ちになって獣の足跡を追いかけてみよう」「農業体験を通して獣害問題を考えよう」などユニークな意見が多く出された。また目的や実施者、どのようにして集客するかなど、プログラムの詳細を考えた。

【まとめ】

獣害問題は、駆除や食肉化などといった対策的な問題で取り上げられることが多い。被害を受けている人たちにとっては、目障りなものであろう。しかし、人間が他の生物と共生していくことを考えると、人と生きものに関する問題であり、環境教育の題材としてとても価値のあるものである。また、生態系はもちろん、私たちの暮らしに大きな影響を及ぼす問題である。直接被害を受ける人たちだけでなく、都市部に住む人たちも、しっかりと考えていかなければならない。



エネルギー大臣になろう！～ゲームで考える環境教育～

実施者：藤木 勇光・小西 金平(電源開発株式会社)

小寺 昭彦(サイエンスカクテルプロジェクト)

【概要】

このワークショップは、カードゲームを行うことで、エネルギーと環境のつながりについて学ぶきっかけ作りを行うものである。

1 チームをひとつの「国」と見立て、その国のエネルギー資源、経済、環境影響などのバランスを考えながら、暮らしを支えるエネルギーの安定供給を実現するための合意形成を行う。国の「政策」を決定し実行する過程から、エネルギー源の選択に主体的に関わることや、意思決定の際に求められる要素を体験する。

【実施内容（ゲームの流れと参加者の体験）】

1) 閣議

1チーム4名程度のグループに分かれ、各グループが1枚ずつ「国カード」を引くことにより、その「国」の条件を決定する。「国カード」には経済力や資源条件、発電単価等が記されており、国の特徴が示されている。これを前提条件として、電気料金(経済性)・環境負荷・稼働率(安定性)・自給率の4つの要素の中から第1優先項目、第2優先項目を決めてそれを公約とする。公約達成を目指すという形での国民満足度の高さも同時に競う。

2) 第1ターム

発電所カードには水力、石炭火力、石油火力、ガス火力、原子力、風力、太陽光、ゴミ、バイオマス、地熱の10種類があり、それぞれの特徴を反映した発電単価、環境性能、設備稼働率、自給率の数字が記されている。それぞれの条件に基づいて発電所カードの種類と枚数を選択することにより、発電所を「建設」する。これを通して話し合い(閣議)による合意形成(意思決定)を体験する。建設が終了すると、2つのアクシデントが発生する(アクシデントカードをひく)。

アクシデントカードとは：各タームの終わりに引くカード。世界共通のものとその国独自の2つのアクシデントが発生し、発電所カードに影響を及ぼす。アクシデントの内容は、気候変動、地震、反対運動、戦争、政策変更、放射能事故、技術革新、資源開発など。

第1タームの建設とアクシデントカードの結果を加味し、4つの要素を計算し中間発表を行う。

3) 第2ターム

第1タームで生じたアクシデントを踏まえて、冒頭で掲げた公約を達成すべく、さらに発電所を増設する。そして、第1ターム同様に、建設後には2つのアクシデントが発生する。

4) 最終結果

電気料金、環境負荷、稼働率、自給率、国民満足度を算出したものに加え、合意形成の度合い(ゲームは話し合いのもとに進

められたか)も自己評価する。この結果を5段階で評価し、その合計値を他の国と比較して順位を決める。

5) 発表

各タームで建設した発電所や、アクシデントカード、最終結果の数値をまとめ、全体で結果を共有する。

6) 話し合いとまとめ

ゲームの体験を元に、エネルギー政策について考える際に必要なこと、合意形成で意識すべきことなどを話し合った。特に今回のワークショップでは、参加者を先進国(2チーム)と途上国(2チーム)の2条件に分けることでどのような電源構成になるか、アクシデントの違いで結果がどう変わるか、それによる気づきはどんな点かなどを比較した。また途上国の電源構成について、ゲームを通じて途上国の立場を経験し、その留意点などについても話し合うことができた。

【まとめ】

参加者にリアルだと感じた部分を質問すると、次のような意見があった。

- ・地震が多い。・風力が立てにくい。
- ・原子力が安くて、環境負荷が少ない。

これらの意見を受け、実は「発電所の特徴」「時間の流れ(エネルギー政策が変わる)」「リスクマネジメント」について理解していくゲームであったことを説明した。

ふりかえりの中で「ゲームでは発電所を簡単に壊すことができたが、実際は費用と時間がかかるのではないか？」と質問があり、実施者から原子力発電の廃炉の難しさを説明、今後の日本のエネルギー政策について話し合いがなされた。その中で「電気をなるべく自分たちの手で買うべきだ」という意見があった。2016年4月から電気の自由化が始まるが、国民が関心を持つにはどうしたらいいか、エネルギーを考えるには「時間軸で考えていくべきだ」という意見に結びつくなど、白熱した話し合いとなった。参加者が主体的にエネルギー環境教育を考えることができた。



ご当地 GEMS ～地域に根差したアクティブ・ラーニング～

実施者: 柴原 みどり・鴨川 光(ジャパン GEMS センター)
武石 泉(株式会社日能研)

【概要】

「GEMS(ジェムズ)」とは、アメリカで生まれた科学・数学領域の体験型プログラムを日本版にアレンジしたものである。このワークショップでは、それを参加者に体験してもらい、環境教育の場での実践につなげる。今回は文化遺産調査という考古学的ラーニングを行った。その後、グループごとに神話・民話を作って発表し、GEMS という教育プログラムはどのような効果があるのか、子どもに向けて行う場合の方法などを説明した。

【実施内容】

1) 自己紹介を兼ねたミニワーク

今後のワークのウォーミングアップと参加者の自己紹介を兼ねて、“共通点を探す”ゲームを行った。お弁当の写真が印刷されたトランプを1人1枚配り、目が合った人とペアを組み、お互いのお弁当の共通点を探し、最も多くの共通点を見つけることができたペアが優勝というルールで行った。

2) 文化遺産調査

GEMS の「文化遺産調査」という考古学的プログラムを実施した。清里の森の中で見つけた物(木の枝、石、木の実、木の葉など)を各テーブルに配布し、自由な基準で何らかの共通点を見つけ、好きなように分類してもらった。そして、1 グループに2本、輪にした紐を配り、それを使用してグループ分け、線引きをする。見た目の色、形状、無機物/有機物など様々な分類が出来た。その人のその時持っている知識や価値観によって、分類の仕方は変わり、議論が生まれるのであり、子どもと大人では当然違うという話をした。次に、靴箱の中に古代と現代を想定した土を層状に入れた“貝塚”を配布した。考古学者になりきって発掘をし、この貝塚から人々がどんな生活をしていたのか、どんな文化をもっていたかなど推察してもらった。さらにまた分類を行い、清里周辺では2千年前、どんな様子だったのか考えてみるという課題を出した。発表の中には、清里を通る鉄道・小海線には海ノ口という名前の駅があるため、海があったのではないかと推測したグループもあった。しかし、調べてみると清里に海はなかったため、昔の人が海と名付けるようなものが他にあったのではないかと考察が広がっていった。サイエンスは絶対ではなく、歴史によって変わっていく場合も多数決で決まることもある。子どもに伝える時は、例えば惑星の覚え方もただの暗記ではなく、概念で捉えていけば違和感はないはずなのである。

3) 神話を作る

短い神話(カラスがなぜ真っ黒で、あのような声で鳴くのかを説明した話)を紹介し、言い伝えや神話、民話は昔の人の論理であり、まだ科学で証明出来ないことの原因付けであると説明した。次のワークでは、グループごとに神話を作った。お題は自由で、

10 分間で、八ヶ岳や富士山にまつわる話、なぜ雨が降るのかを理由付けた話などが発表された。

4) GEMS とは

GEMS はプロの科学者たちがカリフォルニア大学で開発したプログラムである。これは科学者の思考プロセスを体験するプログラムであり、知識を教えるということよりも、思考のプロセスをつくることに重きを置いている。そのために能動的な課題解決学習(アクティブ・ラーニング)が重要であるとされた。子どもたちが自ら課題を見つけるためには、興味や好奇心を引き出さなければならない。効果的なのは、身近なものを教材として使うことであり、地域色のある教育は、アクティブ・ラーニングへの近道である。実際に GEMS のプログラムで使われている物は、近くのスーパーやホームセンターで手に入るものである。また、言葉は思考するうえで大変重要なツールであり、方言や訛りがある所ではその地域の言葉を使う方が良い。そして「新しいことを知るよりも当たり前を覆す」ということが、子どもの能動的な力を引き出すのである。GEMS は、「このプログラム時間で終わらず、持ち帰って続きを考えようと探究が続くことを意識している」という言葉で、今回のワークショップを締めくくった。

【まとめ】

共通点を探すというテーマで、お弁当トランプを使ったワークから始まり、文化遺産調査を経て神話づくりと、3 時間のワークショップの中で、GEMS がどんな学び方であるのかしっかりと体感していただき、参加者一人ひとりが自分のフィールドに持ち帰って、実践につなげられることを期待している。



自然学校の 30 年を振り返りこれからの 20 年を考える

実施者: 森 高一 (NPO 法人日本エコツーリズムセンター)

木邑 優子 (グレイシアカデミー)

【概要】

1996 年、(公社)日本環境教育フォーラム(以降、JEEF)を中心に「自然学校宣言」を出してから 2016 年で 20 年を迎える。20 年という年月を経て、社会情勢が変わっていく中で、自然学校も全国的に広がり、活動も活発化してきた。その自然学校の出来事や役割・社会的位置と同時に、日本の教育関係の動きについて振り返った。そこから、今後、社会で自然学校(環境教育)の機能がどう発展できるのか、20 年先を見据えた自然学校の可能性について考えた。また、2016 年度に自然学校を振り返る全国規模のフォーラムを企画中で、その企画内容について参加者と共に意見出しを行った。

【実施内容】

1) はじめに

「自然学校宣言」から 20 年。環境教育に深く携わってきた JEEF 理事長である川嶋直氏から、自然学校の成り立ち、現在の環境教育の現状について説明があった。現在は個々の人物・団体が環境教育を行ってきている。これを、2020 年に向けて協力体制を組み、これからの自然学校の 30 年をどのようにしていくか考え、『自然に学ぶ・育む場と人の全国フォーラム(仮)』のプロジェクトについて、意見が欲しいという話をした。



2) 自然学校の 30 年を振り返る

参加者を 4 つのグループに分け、そのグループの中で自然学校に精通したキーパーソンから話を聞き、グループ内で環境教育をめぐる 30 年を振り返った。特に重要な出来事として、以下のようなことが挙げられた。

- ①世界の環境関係の動き:ワシントン条約やラムサール条約等
- ②日本の環境と教育関係の動き:小・中学校での「総合的な学習の時間」の導入や環境教育等促進法の制定等
- ③環境教育関係:1996 年「自然学校宣言」等

また、グループ内で一番若い人が感じたことについて発表した。そこでは、自然学校の歴史を振り返るには、同時に社会でどのようなことが起きているかを把握しなければならない。また、現状を知るということも必要だが、そのためには歴史を振り返ることも大切である。さらには、学校教育として、その学校だけで簡潔にしまっていること、私立学校との連携、リスク管理等にも課題があるという意見が出た。

3) 『自然に学ぶ・育む場と人の全国フォーラム(仮)』の企画共有

2016~2017 年に向け、「自然に学ぶ・育む場と人の全国フォーラム(仮)」を行う予定だ。このフォーラムは、今まで自然学校に関わってきた人と人をつなぎ総括を行うこと、それぞれ環境教育に携わってきた人の思いの共有、さらには、現在まで環境教育を開拓してきた人との世代交代を目的としている。その目的を基に、これからの自然学校の可能性を追求するフォーラムになると伝えた。

4) フォーラムの企画の意見出し

- フォーラムの企画の可能性を探り、内容の意見出しを行った。
- ・30 年の歴史がある自然学校を評価し、その自然学校のプログラムを受けた人から生の声を聴き、どのような人が育成されたか、今後どのような人材を育成するべきか考える。
 - ・これからの自然学校の価値や課題を考える。また、一般の方にもわかりやすい自然学校づくりの提案。
 - ・国際、医療・福祉、教育現場への環境教育の働きかけを強化。
 - ・持続可能な社会・未来に向けて開発をしてきたが、何が豊かなのか、幸せとは何かを考える。
- これらのことから、フォーラムのプレゼンター等を考え、今後に向けた自然学校の展開への提示が課題となった。

【まとめ】

2016 年には「自然学校宣言」から 20 年という節目を迎える。今後、30 年に向かうにあたり、なんらかの社会的な成果をアウトプットし、多くの人に知ってもらい、自然学校の価値を確立していくことが目標であるとまとめた。



環境教育の基礎…自然とは？命とは？

実施者：安西 英明(公益財団法人日本野鳥の会)

【概要】

環境教育に取り組むために必要な考え方を、クイズ形式でレクチャーした。まず生物多様性や持続可能性について、生物の基礎知識から考えてもらった。野外での自然観察の後、地球の誕生からさまざまな命が誕生して、今日に至る歴史を確認した。

【実施内容】

1) 自己紹介、環境教育とは？

はじめに、参加者の自己紹介とともに、それぞれが考える環境教育に関するキーワードを共有した。その後、環境教育は「環境の教育」ではなく、「環境問題に対応するための教育」であり、時間軸と空間軸を広げて考える視点が必要であるという話しをした。また、命の素晴らしさと厳しさの両面を考えることが必要であることを感じてもらった。

2) 命の素晴らしさ

空間軸を広げる観点から「地球に生物の種はどのくらいいるか？」「虫は何種いるか？」などのクイズを行いながら話を進めた。例えば、日本では昆虫が3万種と言われているものの、未発見、未分類が多く、それらを考慮すると、20万種にも及ぶ。生物はまだわかっていないことが多いのである。

生物の分類では、ヒトは動物界＞脊椎動物門＞哺乳類(綱)＞サル目＞ヒト科に属しているが、動物界は消費者であり、生物多様性と持続可能性を考えるには、ほかに生産者たる植物界と分解者が不可欠である。持続可能性の事例として、小鳥の嘴はピンセット型が多く、春夏は虫の増えすぎを抑え、秋冬は木の実を丸呑みして種子の散布に貢献している話などをした。

3) 命の厳しさ

多様性と持続可能性の背景には、命の多くは他の命の食物になるので、生き残った一部だけが子孫を担うという原則がある。上位消費者に位置する鳥類でさえ、自然界では天敵に囲まれ、日々サバイバルであるため、ペアやファミリーの関係を続けられないのが普通である。捕食者ほど増えすぎのわけにはいかず、猛禽類で最速、最強のハンターと言われるハヤブサでも、狩りの成功率は2割ほど。虫の生存率のデータでは、4,287個の蛾の卵から成虫になれたのがたったの7匹。私たちが目にする命は、生き残ったほんの一部でしかないというのが現実である。

4) 自然観察

観察ポイントとして、タネの作戦を探ろう、というテーマを提示した。色づく実は鳥作戦として小鳥に丸呑みしてもらおうを目指しているが、色づかない実はどうやって運ばれるのか？風作戦、獣作戦、隠して忘れて作戦など、移動できない植物の工夫を考えてみようというものである。外に出て清泉寮から八ヶ岳自然ふれあいセンター付近を散策し、タネのほかにも植物が春を待つ仕組みを観察したり、スズメ・カワラヒワ・アカゲラ、クロスズメバチ(女

王)・コモリグモなどを観察した。室内に戻った後は見つけた生物についてふりかえりを行い、質疑応答をした。



5) 時間軸で考える

最後に、地球の歴史46億年の中で、どんな生物がいつ頃誕生したのか？というクイズを行った。さまざまな植物、昆虫、あるいは菌類や脊椎動物の模型などを並べ、参加者がそれらを進化の時代に見合うようにセットするワーク形式とした。光合成によって酸素が満ちてオゾン層が形成されたお陰で、地表で命が生存できるようになったという事実を後で解説すると、セットした生物たちが5億年前以後になって生まれた経緯などに、感嘆の声があがっていた。時間軸を考えることで、歴史の中でかけがえのない今と自分があることを感じてもらった。



【まとめ】

生きものを通して、改めて環境教育について考える時間とした。時間軸と空間軸を広げてみることで、文明の有難さと危うさ、命の尊さを感じ、それぞれの現在の活動や暮らしを見直すきっかけにもなったのではないだろうか。

「PBE:地域に根ざした学び」を考える

実施者:大前 純一・高野 孝子(NPO 法人 ECOPLUS)

【概要】

「地域に根ざした学び」というテーマに対して、「場」「教育」をキーワードに、様々な視点・具体例から、皆で意見を共有した。「環境教育」及びPBE(Place Based Education)の定義についての紹介の後、4～5人のグループに分かれ、意見交換及び発表を行うという流れとした。「地域」の課題に対して既に取り組んでいる参加者が多く、皆が自由に意見を発信できる雰囲気のもと、経験に基づく様々な知識や考え方が共有された。

【実施内容】

1)イントロダクション・自己紹介

今回のワークショップのテーマである「地域」や「場」、「学び・教育」について簡単に説明した後、参加者がそれぞれ自己紹介を行った。PBEの定義や「場」の意味、「学びとは何か」など、テーマに関する根本的な考え方が共有された。自己紹介では、各参加者がどのように「地域」と関わっているかについて焦点が当てられ、傾向として「地域」への具体的なアプローチの仕方を模索している人が多いことが分かった。

2)「環境教育」・「場の教育」とは

実施者より、環境教育とは何か、及びPBEの概要について紹介した。「環境教育」という言葉が初めて公式に使われたのは1948年であり、その後様々な定義が当てはめられ、またその重要性が議論されてきた。現在では、人と地球の調和という考えに基づいた持続可能性を実現するための教育である、という見方がなされている。また「場」とは単なる場所ではなく、ある地域やその空間・時間全体を意味し、伝統や家族体系など様々な営みを内包する点で「身体性を伴う関係」が存在するとされている。そのような「場・地域」に根ざした教育体系がPBEであり、地域の環境・伝統文化・教育を基礎として、人々の生きる力やアイデンティティを育て、社会地域の持続可能性を高めることがその目的となる。



3)グループディスカッション①

4～5人のグループに分かれ、環境教育及びPBEについての紹介を受けての感想や質問、ワークショップで深めていきたい内容などの話し合いを行った。その後、各グループからそれぞれの意見を発表した。公教育が社会の体制にどう影響するのか、地域を「題材」として見せるだけでなく、伝えるにはどうすればよいか、PBEの具体例は何か、また「場の身体性」の意味は何か、などの質問があがった。これらの意見を整理しながら、地域の「場」が教育として与えた影響、現在の公教育の現状、地域という題材を扱う視点などについて、具体例を交えながら話し合った。各人が自身の意見や経験を活発に発信していた。



4)グループディスカッション②

地域における現状と課題について、まず各参加者が個人の意見を書きとめ、その後グループ内で共有し、自由に話し合った。グループ内での意見交換は、予定時間を上回るほど白熱したものとなった。最後に、各グループで最も盛り上がった内容について簡単に発表し、都会における「地域に根ざした学び」とは、環境教育教材の利用者の二極化の問題などについての内容を共有した。

【まとめ】

今回のワークショップは「地域」「場の教育」というテーマについて、全体で根本的な知識や考え方を共有した後、グループに分かれてディスカッションをし、最後に意見交換をするという流れで行った。既に何らかの形で「地域」に関わる活動をしている参加者が多く、「場」「教育」という抽象的でアカデミックな内容に対して具体例を添えたり、関連する自身の知識や経験を語ったりするような場面も多く見受けられた。多様なバックグラウンドを持つ参加者が集まった本ワークショップは、皆が気兼ねなく自由に意見や質問を出し合い、活発な意見交換の場となった。

「若者が地域で生きる・暮らす」を考える 3 時間

実施者: 谷口 哲郎(岩木山自然学校) ・ 坪松 美紗(久志地域交流推進協議会)

【概要】

若者が地域に住むにはどうしたらいいのか。若者である私たちが地域のためにどんなことができるのだろうか。

地域づくりや過疎化が進む村や町をキーワードに、これから私たちが地域で生きていくためのヒントを、ワールドカフェ方式で話し合った。

【実施内容】

1) お互いを知ろう

はじめにお互いを知る時間として、A3の紙を4等分したものに名前、出身地、所属、この時間で得たいものを書き出し、お互いに自己紹介をした。その中で、具体的に自分がこれからどんなことをしていきたいのか共有した。

2) 若者が地域で暮らしていくには

それぞれ地方に暮らす実施者 2 名(坪松・谷口)に加え、ゲストとして田之下雅之氏にも協力してもらった。

沖縄に移住し始めた坪松と、白神山地の山懐で自然学校運営をする傍らで、環境調査にも携わる谷口、また東京を拠点に、富山と丸の内の 2 つの地域をつなぐ活動を行っている田之下氏。地域に暮らし感じた不安や地域の問題を取り上げながら、自身の活動紹介を行った。まずは、坪松。暮らしていく中で感じる生きることの難しさや、地域の中で自分がどのような役割をもっているのか。実際に暮らしていくための収入源はどこから確保するのか。地域に住むことでのメリット、デメリットを取り上げ、これから若者が暮らしていくにはどうしたらいいのかを投げかけた。続いて、谷口。個人事業主と NPO の 2 足の草鞋を履く。個人事業主として行っている環境調査と、NPO として行っている野外活動で、どのように収益を上げ、仕事を起こしていくか説明した。最後に田之下氏。主に地域と都市をいかに結んでいくかということをテーマに、首都圏との関わり方、また東京と富山を結び付けるきっかけ作りについて説明を行った。

その中でも、地域と首都圏をつなぐ若手コーディネーターの育成や、地域の若手キーマンの掘り起しを議題とし、地方に住む若手の持つスキルが活かされないまま地域に消費されていることや、何かを新しく始めるにも独自の活動が市や行政の主導権になることで、オリジナルのものになってはいないこと、地域と首都圏をつなぐことでのリアルな問題点を取り上げ、参加者の関心事に触れていった。

【えんたくんワールドカフェ】

実施者の活動紹介から、地域に暮らすことの大変さや地域と首都圏をつなぐこれからの課題を共有し、4 名×6 テーブルに分

かれ、それぞれの関心事について、話し合いを行った。

地域づくりにアンテナを広く持つ人の体験談や、地域に住みたいと考えている人が計画している自身の思い、これから地域と関わって行きたいと考える人の意見や疑問など、それぞれのグループがこれからの地域との関わり方や関心事について、意見をまとめ発表を行い、以下のようなキーワードが出された。

①キーマン探し

- ・地域のキーパーソンと繋がるにはどうしたらいいのか。
- ・地域への入り方、タイミングについて。

②環境教育や ESD をどうやって仕事にしていくのか。

- ・お金の問題

③地域の共感

- ・自分のやりたいことと地域のニーズを合わせるには
- ・地域のまきこみ方

④愛着、魅力

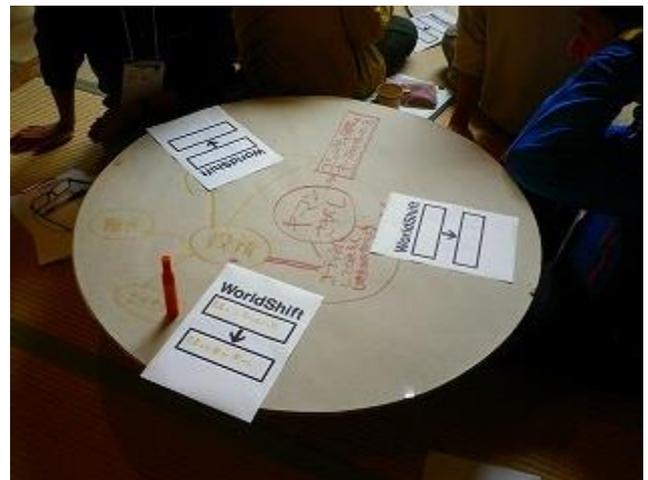
⑤インターカルチュラル

- ・いつかは地元に戻るのか。
- ・U ターン、I ターン就職について

【まとめ、深める時間】

「えんたくんワールドカフェ」にて出たキーワードを元に「もっと深く話したい」という方のため「深める時間」を設けた。気になるキーワードの元に集まり、自由に意見や思いを語る時間とし、最後に参加者同士で共有。

話し合いの中で出たキーワードや誰かの言葉などを自分事として落とし込む時間を設け、発表した。「若者が地域で暮らす、住む」ことの難しさや、課題を取り上げることで、自分の故郷への愛着や関心を再確認すると共に、自分の生き方について考えるワークショップとなった。



里山ってなんだろう ～その意味、価値を考える～

実施者:新田 章伸(NPO 法人里山倶楽部)・谷垣 岳人(龍谷大学里山学研究センター)

【概要】

このワークショップでは、実施者から「里山学研究センター」11年の活動から見えてきた「里山の生物多様性」、「日本の自然観」について紹介し、参加者の様々な立場から「里山」について意見交換を行った。

【実施内容】

1)自己紹介・ワークショップへの想い

自己紹介に続き、参加者へワークショップへの想いを尋ねた。このワークショップには里山での活動を仕事・ボランティアとして多様な活動をしている方がおり、立場によって里山の知識や思い入れも様々だった。里山の意味や価値が曖昧で、それを理解するためワークショップに参加した方も多くいた。

2)里山の意味、価値を考える①～里山の魅力とは～

里山の魅力について参加者それぞれの考えを聞いた。最も多かった意見が「様々な生物が存在する場」、次に「人が遊びや環境教育として利用する場」だった。少数派としては、「無くしたものを取り戻せる懐かしい場」や「イメージとして神々の存在する奥山への入り口」という意見もあがった。

3)里山の意味、価値を考える②～里山の社会的価値とは～

里山の社会的価値について、参加者それぞれの考えを聞いた。今までの質問対象は個人であったため、社会を対象としたこの質問に困惑した様子だったが、「文化や歴史を継承する場」という意見や「生きものとしての人間を学ぶ場」といった意見があがった。総じて里山は人口の多い街中で生活してきた人間が、生物多様な環境で一生物として、自分自身の存在を数少ない場であるという意見であった。

4)実施者(谷垣)からの話①～里山の生物多様性について～

意見交換に続き、里山学の観点から里山の生物多様性を研究している谷垣より話をした。

そもそも里山とは、人が自然と共に暮らし、人も生態系の一部として暮らしてきた場所であり、農耕地である里地とおおよそ人の手の及ばない奥山の間にある二次林を指している。また、活動エリアである京都府“龍谷の森”周辺の里山では、生物数の調査も実施しており、田んぼやため池、雑木林といった里山周辺の環境モザイク構造が里山の生物多様性を支えている。

しかし、近年、農村部での管理放棄や都市近郊での里山の開発が進んでしまい、里山全体の生物の減少、自然を利用する知識と知恵の喪失が問題となっている。

従来の科学コミュニティが専門性を追求する専門共同体を形成してきたのに対して、「里山学」が目指すのは、社会の問題を解決しようとする学際的な問題共同体の形成である。人と自然が

共に生きてきた過去をふりかえり、将来にわたって人が人らしく生きること、自然の豊かさが、どのようにすれば相関するのか、その可能性を探究する学問である。

5)実施者(新田)からの話②

～継承していきたい日本の自然観について～

新田から「継承したい日本の自然観」という冊子の紹介をした。海外での活動経験から、日本との自然観の差異を感じてきた。日本に合った環境教育を行うべく、日本人の自然に対する伝統的な価値観を再認識し、これからの生き方、暮らし方を創造していくことが必要であると提起した。

その後、冊子から「自然(おのずから)」を核に「和 敬 清 寂 愛」の5つの要素に価値を見出し、「自然体」という日本人が培ってきた生き方を今後につなげていきたいと話した。

6)ふりかえり

感想を記入し、参加者 2～3 名で分かち合った。

【まとめ】

様々な立場の参加者が一堂に会し、多種多様な里山に対しての価値観を見出した。谷垣の話から、里山とは人が一つの生命として他の生物と一様に存在できる場である、ということが理解できたのではないかと。新田からは、そもそも自然とは科学技術の上に、利便性や経済性を構築していくものではなく、自らの伝統的な自然観について考え意識することで、生活に活かされていくものであると説明した。



野生生物と共生する環境地域づくりの進め方

実施者:小河原 孝生(株式会社生態計画研究所)

ゲストスピーカー:大西 信正(南アルプス生態邑(ニホンジカ研究者))

【概要】

前半は、小河原より「野生動物と共生する環境地域づくりの進め方」について、概要と過去から現在にかけての取り組みの紹介をした。

後半は、大西から実際に山梨県南巨摩郡早川町で行っている活動についての紹介をし、その後質疑応答の時間を設けた。

【実施内容】

1) 自己紹介

実施者の自己紹介の後、参加者一人ずつに「名前」「所属」「現在の活動」「このワークショップを選んだ理由」などを発表してもらった。

2) 概要と取り組みについて

まずは小河原から、「野生動物と共生する環境地域づくりの進め方」の発表をした。過去の世界や日本での環境教育の流れから始まり、中山間地域の重要課題である「野生動物と共生する地域づくり」を環境教育の文脈で捉え直すことを提言した。それが、以下の「地域の自然環境保全活動プログラム」である。

①達成目標に合わせて、自然環境についての理解が個体から個体群・生物群集・生態系へと広がるような段階的・系統的プログラムを、野生動物の生態調査に基づき構築すること。

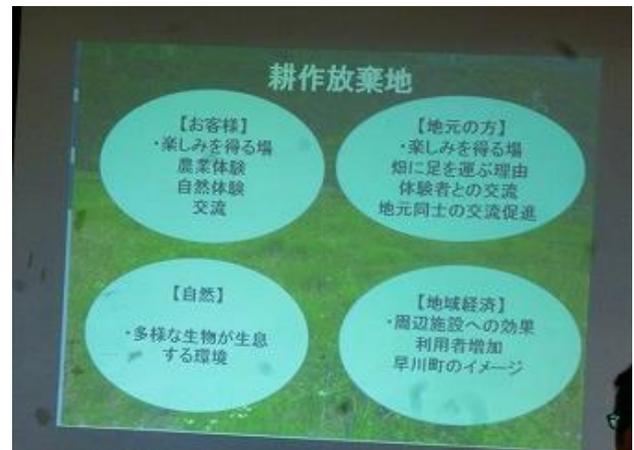
②主に都市に居住する地域外からの来訪者(利用者)の立場と同時に、地域内に居住し耕作を行っている、生活者としての地域住民の立場に立ったプログラムを構築すること。

その例として、山梨県南巨摩郡早川町での取り組みを紹介した。早川町では、「早川フィールドミュージアム構想」という、地域それ自体をひとつの博物館ととらえ、地域固有の文化や環境を、地域住民が主体となった活動を通して保護・保全し、来訪者に提供(利用)することによって、地域活性化につなげていく取り組みを行っている。

3) 実際の活動の紹介

次に大西より、実際に早川町で活動している内容についての発表をした。自己紹介に続いて、早川町という地域に受け入れられるまでの経緯・苦労などの話をした。最初は地域になかなか受け入れられず、積極的には関わられなかったが、シカの話から猟師の方と仲良くなり、フィールドの利用を許可してもらったり、祭り等の地域行事の運営を任せられたりと、徐々に地域の人々に受け入れられたという実体験を発表した。現在の活動内容として、地元の方にガイドしてもらうツアー「日本のマチュピチュ 茂倉集落ツアー」「猟師さんと森を歩く 早川ジビエツアー」の紹介や、自身がガイドしているツアー「ワイルドライフツアー ニホンジカを探そ

う」の紹介、耕作放棄地の利用などの紹介をした。そして、地元住民の普段の生活そのものが、実は観光や地域活性化の宝庫(資源)であり、持続可能な自然利用であること、来訪者は新しい体験が感動につながり、自身の生活・地域を見直す機会になること、という両者の視点で、地域の良さを再発見できると締めくくった。



4) 質疑応答

獣害対策や早川町での取り組み、地域や来訪者の意見など、様々な質問が絶えず、活発な意見交換の場となった。

5) 感想の記入

最後に、このワークショップの感想を、参加者それぞれが用紙に記入して終了した。

【まとめ】

今回のワークショップは、小河原より環境教育のこれまでの動きから現在の課題と取り組みを提示し、大西より実際の取り組みについての紹介という形式だった。実際に地域に入って取り組んでいることや、堅苦しさのない雰囲気から、参加者からの質問が途切れることがなかった。シカの角や皮などの実物も手にとりいただき、最後まで参加者が興味を示してくれた。



持続可能な未来のための科学技術とのつきあい方

実施者:小寺 昭彦(サイエンスカクテルプロジェクト)

【概要】

「我々の暮らし、社会、環境を変える、または影響を与えるのではないかと思う科学技術」について、ブレインストーミングで参加者が出し合い、その中から2回のワークで3つのトピックを取り上げ、グループごとにケーススタディを実施した。トピックの内容が変わるごとにグループ替えを行い、様々な視点から科学技術を考えた。

今回のワークショップでは、より深く科学技術のこれからと私たちについて向き合うきっかけとした。

【実施内容】

1)自己紹介

参加者 3、4 人で1グループに分かれ、参加者同士がお互いを知るために、グループ内で自己紹介を行った。それぞれ「名前」、「所属」、「自分の活動」を共有した。互いの活動を知り、親交を深め、グループワークがより進みやすい雰囲気になった。

2)ブレインストーミング、共有

「私たちの暮らし、社会、環境を変える、または影響を与えるのではないかと思う科学技術」という題で、制限時間以内にそれぞれがトピックを付箋に書いた。その後、グループ内でトピックを共有し、さらに全体でも行った。具体的なトピックとしては、後述するテーマ以外に、宇宙開発、材料、エネルギー、バイオサイエンスなど 50 以上の多岐にわたる項目があげられた。参加者には他の参加者の科学技術に対する意見を聞いて、科学技術の多様性を考えるきっかけとしてもらった。

3)ケーススタディ 1「医療」

テーマを「医療」とし、グループごとに「進化する医療に私たちはどう向き合うか」を考え、全体に共有した。ポジティブな意見だけでなく、以下のようなネガティブな意見もあがっていた。

- ・過去の歴史からみる、後から医療の副作用が出る可能性
 - 公害もだが、科学技術は後から問題が出てくるケースが多い。
 - ・生活の仕方、生きることの選択がより自由になる
 - 科学技術で脂肪を減らしたり、自分で痩せることが容易になる。生きるか死ぬかの選択も自由になる。
 - ・自己アイデンティティの喪失
 - 整形で皆が同じ顔になり、個性がなくなる。
- いずれのグループも科学技術は、利便性と不確定なリスクをはらんでいることを伝えていた。

4)ケーススタディ 2「人工知能」・「自動運転」

2 回目のケーススタディでは、それぞれ近いテーマだったが、

より参加者の興味のあるテーマごとに分かれ、「人工知能」について2グループ、「自動運転」について1グループでワークを進めた。グループ内で1人ずつ感じていることを共有し、まとめ、全体でも共有した。

① AI(人工知能)

2 グループからは、人工知能により様々な自動化が進むことで見えない不信感を感じる、きちんと知らないことで不安がある、生まれる仕事は減り、無くなる仕事が増えるのではないかと、誤作動は誰の責任になるのかなど、期待よりもネガティブな意見が多く出た。改めて話し合ったことで、自分たちの想定できないことが起こるだろうという漠然とした不安をもったようだった。

② 自動運転

高齢者や障害者の運転の可能性が推奨される一方で、人工知能のグループと同様に、事故の責任は誰が負うのかという疑問や、自動運転はどんな人でも運転できるため、自動車の個人所有が当たり前になるという意見など、多様な未来像が示された。

いずれのグループも、今まで人がして当たり前であった行為が、自動化することに対する、現実的なとまどいを感じているようであった。

【まとめ】

科学技術の進歩は、人々の暮らしを豊かにしてきた。今や科学技術なしでは生活できない時代となっていて、科学技術の恩恵は誰もが認識している。しかし、科学技術が進むことで、想定外の事態が発生する可能性もある。環境問題の解決を助ける手段としても、持続可能な未来のために大きく貢献できる可能性もある。

私たちは、科学技術について、利便性も危険性も知る必要があり、関わろうとする人を増やしていくべきである。科学技術と私たちの付き合い方を考えていただくワークショップとなった。



サステイナブル・ツーリズム国際基準を自然学校に！

実施者：梅崎 靖志 ・ 森 高一（NPO 法人日本エコツーリズムセンター）

【概要】

国連世界観光機関（UNWTO）が進める GSTC（サステイナブル・ツーリズム協議会）の国際基準は、サステイナブル・ツーリズムのあり方を定めた世界共通の最低限の基準である。日本ではまだなじみがないため、国際基準の概要について説明を行った上で、国際基準を構成する項目を参加者の視点で整理し、基準の内容について理解を深めた。さらに、日本へ基準を導入する際に補足すべき項目について話し合った。

【実施内容】

1) 自己紹介

自己紹介では、自身のバックグラウンドと、どのような関心や期待を持って参加したか共有した。海外からの観光客の受け入れを考えている方や、エコツーリズムを実際にやってみようという方から、サステイナブル・ツーリズムがどのように活かせるかを知るために基本的なことを学びたいという方まで、様々な興味関心やバックグラウンドを持つ参加者が集まった。

2) GSTC（グローバル・サステイナブル・ツーリズム協議会）の

基準を紹介

GSTC 基準は、持続可能な観光のあり方を定めた世界共通の最低限の基準で、大きく4つのテーマに分かれている（①持続性②地域貢献③文化遺産の活性化④環境負荷の低減）。また、国連のミレニアム開発目標である地球規模の課題に対応して作られているため、分野を横断した課題が基準の中に盛り込まれている。

GSTC 基準は、「観光地」を対象としたものと、旅行社やガイドなどの「オペレーター」と「宿泊施設」を対象としたものの2種類がある。また、この基準は世界中の国・地域で共通して適用できるように、各項目の内容は抽象度が高く、各地域を取りまく様々な独自の状況に合わせて、GSTC 基準に適合した認定制度を作るという制度の前提を確認した。

3) 基準の理解と、基準項目の再分類

4～5人からなる計4グループに分かれ、それぞれが基準をじっくりと読んだ。抽象度が高く、具体的な現場の状況をイメージしなければ理解が難しいことから、苦戦する参加者も見られた。その後、参加者の視点で基準を構成する各項目を再分類した。具体的には、各基準を項目ごとにバラバラにして机の上に並べ、類似する内容をグルーピングした上で、グループ相互の関係性を整理した。この作業を通して、国際基準の理解が進み、活発な意見交換がなされた。

4) 中間発表

中間発表では、各グループの分類の仕方と、基準の内容に関する気づいた点を共有した。

いくつかの分類方法が提案されたが、2つのグループでは、基準で定められた内容を「企業内での取り組み」と「企業外で行う取り組み」に分類した。ジェンダーやダイバーシティなど、持続可能な観光につながる様々なキーワードを使って分類したグループもあり、以下のような気づきがあった。

- ・基準は、大資本による観光地からの搾取を防ぐための基本的なものではないか。
- ・ESDのような教育的な要素を含む項目が少ない。
- ・景観の保護に関する項目が少ない。
- ・地域の魅力を形成する地域づくりや、それをどのように伝えるか、という視点は含まれていない。

また、この基準は観光地域の持続可能性を守るためにはめられた「たが」のようなものであり、ネガティブチェックが多いという点も、各グループから出てきた視点である。

【まとめ】

最後に、この基準を日本に導入する際に、追加したい項目について話し合い、以下の通り共有した。

- ・環境に配慮した交通手段の選択肢を用意
- ・防災、減災への対応や安全管理トレーニングと保険加入
- ・ガイドやプログラムの質の維持・向上と評価の仕組み
- ・郷土食や伝統行事への参加など、地域独自の体験を通じて理解を深めるプログラム内容
- ・お客さんとしてマイノリティを受け入れやすくすること（多言語対応、多文化対応など）
- ・持続可能な組織維持と、利用者にとって利用しやすいバランスのとれた適正価格の設定
- ・地域、里山、人との接点である、自然を活かした観光
- ・地域内の合意形成（自然保護と開発のバランス）
- ・地域景観の保全

最後に実施者から、「たが」をはめるための基準としてだけでなく、魅力ある地域づくりのように活かしていくか」とコメントし、ワークショップのまとめとした。



体感、出航！宇宙船地球丸。「天文は苦手」吹っ飛ばせ

実施者：齊藤 透(＜月＞の会・東京)・中村 照夫

【概要】

環境教育に携わっているが、環境の基礎である「天文」が苦手という人は多い。地球がひとつの天体であることすら、普段の生活の中では忘れがちであるが、それを感じることは容易にできる。このワークショップでは、太陽系を構成する天体である地球、月、太陽の位置関係を視覚的に理解し、古くから人類が生活の中で使用してきた太陰暦について解説することを目的とした。終了後、夜の情報交換会の最中に、外に出て、実際に天体望遠鏡でスバル星雲等を観察する観望会もオプションとして実施した。

【実施内容】

1) 自己紹介

参加者同士がお互いを知るために自己紹介を行った。「名前」「所属」「このワークショップに参加した動機」等について共有した。学校関係者、民間企業勤務者、NPO団体関係者等、様々なバックグラウンドの方々が集まっていることが分かった。天文に普段あまり接する機会がないので、この機会に知識を増やすきっかけになれば、という参加動機が多かった。

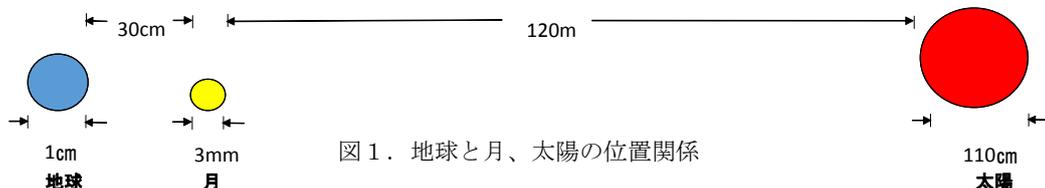
2) 太陽系を構成する天体の位置関係について

導入として、三日月とはどのような形をした月なのか、どちらの向きが欠けているか、というクイズを出題した。普段、西暦で生活をしていると、月の満ち欠けを意識する機会はそのほど多くはないが、月の満ち欠けが 29.5 日の周期で起きていること、これを基に旧暦が作られたこと、昔の人たちは月の満ち欠けを見ながら農耕を行ったりして生活していたこと等の説明をした。

そして直径 30 cm 程度の地球儀を見ながら、地球の直系が 30 cm だとした大気の厚さはどの程度あると思うか、というクイズを出した。答えは 0.2 mm であるが、2~3 cm と答えた回答者が比較的多く、大気がいかに薄いのか、ということに多くの参加者が驚いていた。

次に、参加者に 2 種類の色の粘土を配付し、粘土で直径 1 cm の地球と直径 3 mm の月を作る作業を行った。作った月をテーブルの上に並べ、地球と月がどのくらい離れているか、更には地球の直径が 1 cm の時、太陽の直径がどのくらいになるかを皆で考えた。「地球の直径を 1 cm とした時、地球と月、太陽の位置関係は概ね図 1 のようになる。」という説明をした。

地球と月の間の位置関係は、机上で把握することができるが、



太陽は非常に遠くにあるため、室内で位置関係を体感するのが難しい。そこで皆で外に出て、120m 離れた場所に大きな円形の段ボールを置き、それを太陽に見立てることで、太陽がどれほど遠い場所にあるのかを体感した。

3) 星座について

星座の位置関係を知るための道具として、古くから星座盤が使用されてきた。星座版は天球を平面上に図示したものであり、北極星を中心に星座の位置関係を知ることができる。天球は球形なので、昔はお椀型の星座盤が使われていたこともある。

また、国を治める実力者は、昔から占いを重視してきた。専属の占星師を雇い、占いの結果を基に様々な国の政策が決定されてきた。かつて皆既日食は、この世の終わりだと考えられていた。そのため、実力者に雇われていた占星師は命がけで日食が起きる日を予想していた。これが古代から天文学が発達してきた大きな理由である。

【まとめ】

星空の動きと地球、月、太陽の位置関係等、初心者にも分かりやすいワークショップを心がけた。昼間のワークショップの内容を基に、夜は星空観察会を行い、天文をキーワードに参加者同士の交流を促進することができた。

1200 年前に人類が文明を起こしてから長い間、人類は旧暦を基に生活を営んできた。このワークショップを通じ、地球と月の関係、さらには、そこから生まれた旧暦が重要な役割を果たしてきたことを改めて知る時間とした。



探そう磨こう！環境教育の魅力を伝えるコトバ

実施者：高瀬 桃子(公益財団法人日本野鳥の会)

【概要】

このワークショップでは、「言葉で”伝えること”」をテーマとして実施した。環境教育、特に自然体験活動の現場で伝える活動をしているインタプリター。展示物や広報など言葉で伝える場面も多く、日常で役に立つ“より魅力的な言葉”の作り方を知る第一歩とした。その場で言葉を考えるだけでなく、アイデアを屋外に出て探したり感じたりしながら、言葉と向き合い、作り上げる時間とした。ワークショップでは、レクチャーを踏まえたうえでグループ及び個人ワークを行い、最終的にはアイデアから各自が魅力的なキャッチコピーを作成することを目標として実施した。

【実施内容】

1)はじめに

実施者がインタプリターとして企画を立てていた頃に、いざ広報では、その企画の魅力を伝え切れていない現実があった。それを受け、伝える技術(コピーライティング)を研鑽するようになったが、その過程で「インタプリターこそ、魅力的な言葉を考える“下地”はすでにある」ということに気づき、今も日々現場で言葉を使って伝えることに携わる人たちに、そのエッセンスを伝えたいという経緯で、当ワークショップを実施することにした。

2)レクチャー&プチグループワーク

グループごとに参加者同士の自己紹介を行った後、本題の導入となるプチグループワークを行った。テーマを「双眼鏡」とし、「双眼鏡とは、〇〇〇です」の文に当てはめながら、双眼鏡とは一体どういうものなのか、何ができるのか、といったさまざまなアイデアを各人でできるだけたくさん書き出し、その後グループ内で共有、それぞれのグループで出てきたアイデアを全体に発表した。例)「双眼鏡とは、鳥眼鏡である」「双眼鏡とは、あなたとあなたの距離を縮めるものです」など。

このワークを踏まえたうえで、それそのものの機能を謳うだけではアピール力は弱く、誰かの何かの解決策になることを伝えられると、より受け手にとって魅力的な視点になることをレクチャーした。例)ロボット掃除機：

▲「ロボット掃除機は、自動で掃除をしてくれる家電だ」

◎「ロボット掃除機を買ったら、こどもと過ごす時間が増えた」

この視点は、決して広報のときだけではなく、プログラムやイベントを企画する際に、すでにその観点で考えるべきなのではないかということにもふれ、紹介した。

3)環境教育を伝えるキャッチコピーを作る

本題である環境教育の魅力を伝えるための言葉(キャッチコピー)を考えるために、まずはグループごとに環境教育に関わりのあるテーマを1つ決めた。例)「いきもの」「おさんぽ」「清里ミーティング」。その後、屋外に出て、テーマに関する言葉を考えたり、そのテーマに付随する自身の感情を考えたりするなどの気づきを

得て戻ってきてもらった。それから、グループ内で模造紙と付箋を使いながら共有を行った。「お散歩すると、脚が鍛えられる」「お散歩すると、想像力がつく」「お散歩って、(気持ちの)余裕ができる」など、さまざまな切り口でグループごとにテーマを深掘した。グループ内で出てきた切り口を各人1つ選び出し、1つのキャッチコピーを作成した。

その際、キャッチコピーを考える時に、言いたいことをより魅力的に表現する5つのポイントをレクチャーし、言葉で伝えるときには、「誰に、どのようなことを伝えたいのか」そして、「表現の仕方」という2つの軸で考えることが大事であることを伝えた。

《より魅力的に伝えるための“表現のポイント”》

- ①シンプルであることは鉄則。
- ②違和感はむしろ逆手に取ろう。
- ③数字、代名詞、指示語は効果的。
- ④ひらがなや漢字、色遣いなど、見た目を意識してコントロール。
- ⑤語感を意識することは案外大事。

4)発表・共有

それぞれキャッチコピーを発表した。なぜこのキャッチコピーを考えられたのか、伝えなかったことは何かを補足しながら発表した。

【まとめ】

今回のワークショップでは、1人1つのキャッチコピーを完成させることが目標であったが、グループワークを通して他の人たちの考え方に触れ、そこから貴重なヒントを得たり考えたりすることで、結果的に自身で考える1本のキャッチコピーをより良いものにするという試みでもあった。普段から言葉は何気なく使ってしまうため、キャッチコピーやタイトルなど強く意識せずとも付けられてしまう。きちんと受け手の心に響き、行動を促せるような魅力的なものするのは容易ではなく、そのためには受け手のことを考え、受け手にとって魅力的なことは何なのかを考える必要がある。そのことを、少しでも日々意識するきっかけになったのではないかな。



野外フェスに環境教育を広げる『NATCU FES』

実施者: 鈴木 幸一(アースガーデン)・田之下 雅之(株式会社Tクラフト・プラス)
中野 民夫(東京工業大学/教員)

【概要】

本ワークショップは、フェスの持つ影響力を利用して、環境教育の普及を行うことを目的に行った。自己紹介の後、フェスの概要や「NATCU FES(ナチュフェス)」の歴史を紐解き、野外に出てフェスを体験した。その後室内に戻り、3グループに分かれて、環境教育を伝えるためにどのようなフェスをつくりたいか話し合い、全体で共有を行った。会場には終始音楽を流し、リラックスした雰囲気の中で、ワークショップを進めた。

【実施内容】

1) 即興セッション、自己紹介

まず、ワークショップのオープニングとして、実施者と参加者で横笛・声・手拍子を用いた即興のセッションを行い、会場が一体となる場づくりをした。天井の高い会場に音楽が響き渡った。その後、ワークショップの内容説明、自己紹介を行い、「名前」「所属」「NATCU FES のどこに惹かれたのか」について共有をした。参加者には、フェスに魅力を感じる人や、音楽と関わりがある人が多かった。

2) 【知る】NATCU FES の概要と野外フェスの変遷を知る

・NATCU FES の概要

NATCU FES は、毎年春に行われるアースデイの一環として実施されている。アースデイは1970年代のヒッピー文化から始まり、アースデイ東京は今年で15年目。「みんなで作るアースデイ」をテーマに近年はロハスやスローを訴えている。2015年のアースデイ東京ではNATCU FESのブースを初出展し、日本の各フェスが持つ特徴が「フェス寄り」か「環境教育寄り」かを時系列で示したパネル展示のほか、フェスと環境教育両方のチラシを配布した。

・野外フェスの変遷

日本のフェスはFUJI ROCKに始まる。苗場を舞台に行われ、広大な自然は約4万人の参加者が小さく見えるほど。開始当初から「フジロックエコ」と銘打ち、ボランティアがゴミ分別の案内をするなど環境問題に向き合ってきた。現在は100%地域で回収したバイオディーゼルで電気を回す「ITADAKI FES」や幻想的なキャンドルタワーを用いて大物ゲストを呼ぶことに成功した「CANDLE FES」、自然派のワークショップブースが多く出展される「NATCURAL HIGH!」など、多様性が広がっている。また、イギリスのグラストンベリーや八ヶ岳で行われた「いのちの祭り」などを例に、フェスにはルーツとして環境教育的なものが流れているという話もあがった。

3) 【感じる】ノリを感じ、野外フェスを体験

会場を室内から青空広がる草原へ移し、フェスさながらのスピーカーで音楽を聞きながら、各々自由な時間を過ごした。木があ

る方へ向かう人、空を仰ぐ人、高いところに登る人、仲間同士で踊りだす人、円になって回りだす人、枝や藁で造形物を作る人…。短時間だが個性が現れ、有意義な時間となった。

4) 【考える】環境教育を取り入れたフェスを企画してみよう

室内に戻り、3グループに分かれて、環境教育の要素を盛り込んだフェスを企画した。ワークショップ内でフェスについて知って、体験したことを活かし、「タイトル」「コンセプト」「手法」「内容」を話し合っ

5) 企画の共有

各グループで企画した内容を「KP法」で共有した。

・Nature ハロウィン

近年のハロウィンブームの流れを汲み取り、その地域に住む生きものの仮装をしたり、ジビエ料理を食べたりしながら音楽を聞くフェス。地域の生物多様性や、地産地消を訴える目的がある。ランタンやろうそくを用いて電気の明かりを使わないよう心掛け、ゴミをなるべく出さないなど、環境問題に配慮している。

・Wonder Power Fes

「閉じている五感を開いてみよう」をコンセプトに、富士山を一周しながら行われるキャラバンフェス。日中は郷土料理を食べたり、ゴミ拾いをしたりしながら移動を行い、夜は毎晩音楽や自然の音を聞いて締めくくる。フィナーレは集めたゴミでアートを作ったり、集めた枝でキャンプファイヤーを行ったりして環境問題を訴える。

・火祭(かっさい)

ねぶた祭りで参加者が「ラッセーラ」と叫ぶことをヒントに作られた、自然の景色をバックに火を楽しむフェス。地酒を飲み、たき火を囲みながら、老若男女が口ずさめる短いリズムをたき火が燃え続けている間、歌い続ける。疲れたら抜けてもよい自由参加のフェスとなっている。

【まとめ】

どんなに著名な人の話も、音楽の訴える力には勝つことはできない。今後も音楽の力をいかに環境教育に取り入れていくのが課題である。



地域が蘇る“森林資源を循環させる経済”を考える

実施者: 佐々木 豊志(一般社団法人くりこま高原自然学校)・千葉 弘幸(株式会社千葉工務店)
高橋 正成(株式会社高棟建設工業)・宮原 元美(ミドリムシ不動産)

【概要】

森林資源は、木造建築の建材、木工品や家具の材料、紙の原料、薪炭や木質ペレット燃料など数多くの用途がある。そのためには、森林をつくり資源を得ること、つまり、森の入り口から出口をうまく繋ぎ循環させる必要がある。森林資源の健全な循環の形にスポットを当て、語り合ったワークショップである。

【実施内容】

1) 自己紹介

はじめに、暮らしているところなど簡単な質問を4択で選ぶアクティビティを実施し、その後、参加者及び実施者の自己紹介を行った。



2) 佐々木 豊志による講義

くりこま高原自然学校の紹介、実施者同士の出会い、国産の安全性や、新たな森林資源手段である木質ペレット燃料普及啓発のための活動、“森の入り口”を知ってもらうための活動紹介、手のひらに太陽の家プロジェクトの紹介をした。

3) 千葉 弘幸による講義

日本の森バイオマスネットワークについて紹介、外国産の建材や外国産の畳の危険性について、世界と日本の森林面積、輸入材と国産材の値段の違い、日本の針葉樹林と広葉樹林の分布、林業者の現状及び林業にかかるコスト、建築業の情報から、なぜ国産の木材が使われにくいのか、なぜ針葉樹林が主に使われているのか等について紹介した。

4) 全体シェア

実施者の講義に対する質問や、どのようなことを感じたのかをそれぞれ小グループで語り合った後、全体に共有した。ここでは「針葉樹林が増えているが、使える木はどの位あるのか」や「山から切ったあと、また杉を植えるのか」という質問が出て、日本の道路事情や木に対する価値が変わったこと、林業にかかるコストについて意見が出た。

5) 宮原 元美による講義

ミドリムシ不動産とHPのこだわりの紹介、モーラの家の背景にある「国内林業支援」や「入居者同士、地域のコミュニケーション」といった思いやコンセプトから、自然大学とコラボした活動や、“森の出口”となる国産林使用の賃貸住宅の紹介や、中古住宅での取り組みを紹介した。

【まとめ】

今回のワークショップでは、3人の実施者から日本の森林事情や建築業の裏事情、日本国民の建築に対する現状意識や国産林使用の重大性、国産林使用の現状と難しさなど、森林資源使用の難しさや林業にかかるコスト、樹木の値段といった、経済的な問題についての講義をした。

それを踏まえ、5人1組のグループを作り意見を出し合った。議論が白熱した話題として、「大手の企業に建築を頼む人が多いなら、大手企業に国産林使用を頼んでみてはどうか」という意見や、「国産林の効率の良い伐倒方法はないのか」といった企業との連携で解決できないのか、という意見が出た。

日本の森林事情から、国産林の使用普及や森林を循環させるためにはどうしたらよいか、今後の日本でどのような活動を行ったらよいか、参加者は活発に意見を交わし、全体でも共有され、さらに議論が盛り上がった時間となった。



廃校利用の自然学校の経営

実施者：高木 晴光(NPO 法人ねおす)

ゲストスピーカー：畠山 徹(まちむら交流きこう)

【概要】

今後、自然学校を設立・経営したいと考えている人、自然学校を活かして地域活性化に繋げること、廃校舎の再活用を考えている人を対象に開かれたワークショップ。ゲストスピーカーに畠山氏を迎え、全国の自然学校の様々な事例を紹介した後、質疑応答の時間を設け、それぞれの内容をディスカッション形式で取り上げ廃校利用の自然学校経営の活性化について話し合った。

【実施内容】

1) 実施者(高木)の活動紹介

黒松内ぶなの森の自然学校運営協議会の代表であり、北海道道南・黒松町内を移住拠点とし、自然体験型プログラムの提供や、「自然と人、人と人、社会と自然」をテーマに地域づくりやコミュニケーショントレーニングなどを行っている。元小学校だった施設を借りて、「ぶなの森自然学校」という都市と地域内の交流を創る事業を「仕事」としている。



2) ゲストスピーカー(畠山)による講義

平成4年からの25年間で約7,900校の学校が廃校となっていることを紹介した。廃校発生の要因として、過疎化・都市化・高齢化による児童・生徒数の減少があげられる。また、その他要因として、地域からの廃校要望があることや、施設の老朽化、立地条件、活用先が見つからないケースなども考えられる。

このような課題の解消を図るために、まず、「地域を知ること」「地域の資源を守り活かすこと」「地域の将来像ビジョンを描くこと」が大切である。単に廃校を活用することだけが目的ではなく、地域活性化に向けた手段・方法として、廃校活用を進めていくために、「人」「建物」「お金」の3つのポイントの関係など、その必要性や意義、理念、目的などの再認識が必要であることをあげた。

その結果、7割を超える廃校が社会体育施設、社会教育施設、老人施設、児童福祉施設、民間企業の工場やオフィスなど、様々な用途に活用されている。また、その他利用予定のない廃校施設においても、各自治体では廃校の活用について、地域住民との話し合いを行うなど、活用に向けて積極的に取り組んでいる。

3) 質疑応答

廃校を利用するにあたって、お金の流れや廃校の契約年数、形態、廃校のメリット、地域住民の理解、廃校1年目とその後の違い、資金の維持管理など多くの質問が出た。廃校に伴うお金の流れや維持費、改修費などの金銭面において疑問を抱いている方が多くいた。休校や廃校は大切な地域資源だが、活用しなければ活性化のツールにならず、コストのみがかかってしまう。行政とすれば、財政が切迫している状況でもあるため、取り壊して転売するのも得策である。しかし、それを取り壊す財源もなく、地域のシンボルでもある学校が消えることは悲しいことであり、抵抗があるという意見もあがった。その他多くの疑問に対してそれぞれ実施者の高木・畠山が答えていく形式で質疑応答が続いた。

【まとめ】

廃校は、一見マイナスなイメージを持ってしまう方も少なくない。しかし、プラスに考えれば、誰もがおりとあらゆる活動ができてしまうアイデアの宝庫であること、また地域にとっての廃校のポテンシャルの高さに、改めて気づくことのできるワークショップとなった。



ビギナーのための自然体験型環境教育プログラム

実施者：川嶋 直（公益社団法人日本環境教育フォーラム）

【概要】

「自然体験型の環境教育」というものに、これまであまり接点のなかった人向けのワークショップである。自然体験を通じた環境教育の概要を理解するためのワークショップとして、1時間ほどの自然体験と、KP法（紙芝居プレゼンテーション法）によるレクチャーを行った。

【実施内容】

1) 自己紹介・アイスブレイク

参加者同士の自己紹介とアイスブレイクを兼ねてデートゲームを行った。

1枚のA4用紙に、月曜から金曜の曜日を書き出し、各曜日に参加者1人の名前を書き、すべての曜日のスケジュールを埋める。そして、月曜から順に事前に用紙に書いた自己紹介の内容を見せながら、1対1で簡単な自己紹介をするコミュニケーションを連続して行った。

2) 自然体験

アイスブレイク終了後、「よく見る」「違う角度から見る」の2つをテーマに、自然体験を行った。室内の会場を出て徒歩15分ほどの森へと向かった。森へ行く途中にいくつかのアクティビティを行った。

① あるものしりとり

3人組に分かれ、移動中に目につくもので、しりとりを行った。参加者は道に落ちている葉や茂みの中などを注視しながら歩いていた。

② 人間まちがい探し

参加者に目を閉じてもらい、その間に実施者は服装など頭から足元のどこかを変化させる。参加者は目を開けて、どこが変わったかを探して当てるといった内容。参加者は実施者の様子を注意深くチェックしていた。

③ 時計まわり反対まわり

参加者は片腕を高く上げ、人差し指で時計回りに回す。その回した状態を維持しながら、徐々に腕を下していく。視線より指が下になると、時計回りにしている指が逆の回転に見えてしまうため、途中で参加者の多くが首をかしげていた。

実施場所の森に着いてからは、森の中では木々や落ち葉を生かした3つのアクティビティを行った。

④ スキヤキハイク

2人組になり、1人は渡された小さな鏡の面を上にして鼻の先に付けて歩き、もう1人は足元をみてあげるなどサポートをした。鼻の先に鏡を付けることで、下の視界が遮られる代わりに頭上の景色を見ることができる。参加者はいつもと違った視界を楽しみながら、森の中を歩いた。

⑤ 森の万華鏡

2つの鏡を用意し端と端をテープでとめ、黒い正方形のボードの上にくの字になるように置く。ボード上に集めた落ち葉や木の実を置いて、二面鏡で見ると立体的な万華鏡のような模様を見ることができる。落ち葉や木の実の配置や鏡の角度を変え、時には太陽の光の角度を調節しながら、参加者はそれぞれの森の万華鏡を作り出していた。それぞれの作品を完成させるために、参加者は何か面白いものが落ちていないか注意深く周囲を見まわして探していた。

⑥ 一筆入魂

まとめのアクティビティとして、今まで体験したアクティビティの感想を漢字1文字で表現してもらった。静かな森の中で、色や匂いを感じながら、それぞれ思いついた漢字を書き、なぜその漢字を選んだのか発表し、思いを共有した。

3) ふりかえり

室内に戻り、自然体験のふりかえりを行った。さらに質疑応答を行い、参加者からは積極的に質問が寄せられた。そして最後に、ワークショップの全体をふりかえった。「つかみ」としてのデートゲームから人間まちがい探し、「本体」としてのスキヤキハイクから一筆入魂、「まとめ」としてのふりかえり、質疑応答という、ワークショップの一連の流れを確認した。

【まとめ】

今回の自然体験のねらいは、「よく見る」、「角度を変えて見る」の2つであった。参加者は、森に向かう途中、または森の中で自然を楽しむ一方で、普段あまり気にすることのない景色や自然の見方に驚く様子が見られた。さらに、森から戻ってきた後に、今回行った自然体験の意味をふりかえる解説、質疑応答、KP法による環境教育についての講義を行い、参加者は満足そうな様子であった。



2 日目 全体会 2

全体会 2 「世代を超えて一緒に○○おう！」

@清泉寮新館ホール

進 行 : (公社)日本環境教育フォーラム理事 中野 民夫

今年の全体会 2 では、「世代を超えて一緒にうたおう！」をテーマに、現在社会的にゆるやかな動きが出てきている「環境教育」×「音楽」を取り上げた。その中でも、大きな括りとして「フェス」と「環境教育」を題材に、より世の中に環境教育を広めていくにはどうしたらいいのか、「フェス」という媒体を使うことで、環境教育にいろいろな幅が生まれるのではないだろうかと提案し、世代を超えてみんなで自然の歌を歌うことで、歌の持つ力を実際に体験し、意見や感想を共有する時間となった。



はじめに

「音楽には、いにしえから、国を超え、世代を超え…。楽しく、魂を揺さぶる力がある。」そんな音楽の力を感じられるように「世代を超えて一緒に歌う時間」としていきたくと中野理事は始めた。

また、「おお牧場はみどり(スロバキア・チェコ東部民謡)」や「手のひらを太陽に(日本童謡)」を例にあげ、昔から伝わる歌の中には、自然や環境の情景やいのちの輝きを歌ったものが多くあり、人の心を動かす力を持っていると続けた。

フェスは元々お祭りであり、内容には非常に多くの多様性がある。「NATCU FES(ナチュフェス)」という新しい動きを、東京で行われたアースデイのイベントを例に挙げ、「環境教育」×「音楽」の可能性について、今回の参加者と共に考えていく場を作っていきたいとした。

また、同時にフェスや音楽の力を通して、自然に優しい生き方や考え方、ライフスタイルが自然と伝わるような環境教育的なメッセージも伝えていきたいと続けた。



ミニミニフェスにみんなで挑戦！

「世代を超えて一緒にうたおう自然の詩」

ここからの時間は、参加者全員が出演者になって、自然の中から感じるメッセージや自然の詩を思い出して、浮かんでくる歌や詩を共有する時間とした。

発声練習として「かえるのうた」を輪唱した後は、各々、自然のものからメッセージまたは自然の中の歌探しをテーマに、外へ出かけていった。



帰着後、4人グループを作り、それぞれ持ち帰ったものをグループの中で共有した。共有する中で、世代によって感じ取るメッセージや、歌詞までが異なることなどを発見。全員で共有することで共感や一体感が生まれ、グループ内での発表は盛り上がりを見た。それぞれのグループで歌った感想を全体で出し合い、共有した。「小学校、中学校で歌ったものが多くあった。校歌も郷土の歌として環境教育に取り入れることができるのではないかな。(30代)」、「歌の情景を展示に使うことで展示を見る人の心情に入り込むことはできないだろうか。(30代)」、「声を一度出すことで、アイスブレイクのような使い方もできるのではないかな。いつの間にか人数が増えみんなで合唱することができた。(20代)」、「4人揃えば何とか歌も繋がってくるのではないかなと思っていたが、なかなか繋がらず苦勞し、「我々に必要なものは歌詞カードである」(50代以上)との感想に会場の笑いを誘う場面もあった。



第2ラウンドとして、世代を超えてグループを作り、同じことを行った。参加者からは、「赤とんぼ」の歌詞に解釈の違いがあることに気付いたり、ある自然学校の校歌の成り立ちについて、子ども達からキーワードを出してもらい作成したとの話から、アクティビティの中でも

詩を作り、それを歌にすることもよいのではないかなという意見が出されたりした。

中野理事からは、このミニミニフェスを通して、何か環境教育と音楽をつなげられるきっかけをつかんでもらえたら、とまとめた。



みんなで歌おう

その後は、(公社)日本環境教育フォーラム/川嶋理事長のギター演奏に乗せて、世代を超えて知られている曲「島人ぬ宝」や中野理事作曲の「風が流れてゆく」を合唱した。

また、愛・地球博の「里の自然学校」で生まれた曲「よる」は、インタープリター同士が寮で暮らしていた時にできたもの。様々な人が関わり作り上げた歌は、身近な自然をわかりやすい言葉で表現しており、歌詞の情景をしっかりと連想することができる親しみやすい歌となっていた。

最後に中島みゆきの「時代」を合唱し、全体会2日目の締めくくりとした。



オプションプログラム

◆10分プレゼンテーション

1日目:11月14日(土) (前半)16:15~18:25 (後半)20:10~20:45

◆早朝ワークショップ

2日目:11月15日(日) 7:00~8:00

- 朝の楽しい修行:ヨーガと瞑想と歌
- 手づくりのもみ殻コンロ、ペール缶めかくどの実演!
- ロシアからの旅人と再会しよう ~冬鳥との出会いを求めて~
- 清里朝散歩

◆当日募集ワークショップ 3日目:11月16日(月) 9:00~11:30

- 全体会3・閉会式を企画プロデュース
- 都会っ子集合!地方と都市部をつなげよう!
- 3日間のふりかえりWS
- (マイナス)ゼロ → 1への挑戦
- 初心者のためのアイス・ブレイク大集合♪
- 野外での事故に備える
- 銀粘土で作る 木の葉の純銀アクセサリー
- 虫かふえ オープン!
- ボードゲームで生態系を学ぼう!!
- 実験!発見!やっぱすっきゃねん!
- 清里1/200人の紙芝居づくり
- ユースMTG 清里 ver. ~熱意ある若手求む!!~
- しょう油絞りWS/かとうさんちの暮らし

10分プレゼンテーション 1日目(14日)

(前半) 16:15~18:25

(後半) 20:10~20:45

①16:25~

◆『森の漢字クイズ☆カンジて！人と自然のふか〜い関係』

実施者：河合 智佳子／川田 奈穂子（トヨタの森）

内容： 普段、何げなく書く「漢字」。その漢字一つ一つの形には意味があり、自然のものから成り立っているものがいっぱいある。そんな漢字の成り立ちをクイズにすることで、子どもも大人も楽しく、人と自然のつながりを“感じる”ことができる。どんなフィールドでもすぐに使える漢字クイズを紹介した。

◆『Wilderness First Aid(野外・災害救急法)って何?』

実施者：横堀 勇（(一社)ウィルダネスメディカルアソシエイツジャパン）

内容： 都市部では「First Aid→救急車→病院」の“命のリレー”により多くの人々の命が救われている。このリレーに救急車が参加できない状況で命を繋ぐことは可能なのだろうか。野外活動時や被災時など救急車が不参加となる状況では、傷病者の命は現場の人々の手に委ねられる。“想定外の状況”を“想定内”に変えるもの、それが「Wilderness First Aid(野外・災害救急法)」である。現場にいる民間人の手で命を繋ぐ、この10分の中で、その必要性について紹介した。

◆『地域・社会とともに ~いち電力会社の事例と悩み~』

実施者：小西 金平（電源開発株式会社）

内容： 「地域・社会とともに」。清里ミーティング 2015 のテーマである“地域”という言葉は、J-POWERグループ社会貢献活動の考え方の一つの軸となっている。私たち企業はどのように地域・社会と向き合っているのだろうか。いくつかの事例紹介と小さな悩み・課題を本音で言い合い、立場やフィールドを超えて現状打破や解決に向けて考える場とした。

◆『ツルの映像と音楽で綴る10分間』

実施者：徳永 豊（スリーヒルズ・アソシエイツ）

内容： 本州唯一のナベヅルの渡来地である周南市八代の、ナベヅルの夫婦愛を見せる映像と音楽で綴る10分を披露した。

②16:40~

◆『洋上風力発電の将来(浮体式洋上風力発電への期待)』

実施者：岡田 康彦（(公財)瓦礫を活かす森の長城プロジェクト）

内容： (1)日本の風力発電の現況（約2000基、出力世界19位）
(2)陸上から洋上への世界的流れについて
(3)着床式洋上風力発電が欧米、中国で激増（我が国では30基弱）
(4)浮体式は世界各国で実証試験中（我が国も健闘）
以上の4点について紹介し、皆で考える時間とした。
※②③の時間枠続けての実施。

◆『ふくしま・フルーツサンクスプロジェクト』

実施者：黒岩 卓（ふくしま・フルーツサンクスプロジェクト）

内容： 2011年3月。あの時から、ふくしまは、全国のたくさんの皆さまからの応援と、励ましを頂きながら復興に向け努力してきた。これまで応援してくださった皆さまへの感謝のしるしとして、「ふくしまの最高のフルーツ」を日本の最高の食が出会う街「銀座」にお届けすることにした。銀座のBARの技でふくしまのフルーツが素敵なカクテルに変身する。この活動を通じて、福島が前を向いて歩むために、これから何が必要なのかを紹介した。

◆『環境問題解決のため、科学技術に向き合ってますか?』

実施者：小寺 昭彦（サイエンスカクテルプロジェクト）

内容： 環境への意識が高まり問題解決に向けて行動する意欲を持って、実際の環境問題は複雑で多くのジレンマを孕んでいる。科学技術の進歩も必要だし経済活動も避けられないが、それが新たなリスクにも繋がりがかねない。私たちに必要な事の一つは、科学技術の可能性を引き出し、そこから引き起こされる問題をどう予防し解決するか、しっかり意識することではないだろうか。ここではそうした基本的な認識を確認する時間とした。

◆『地域おこし協力隊員の変容過程から見た地域活性化』

実施者：笹川 貴史子（立教大学大学院）

内容： 近年、国内の農山村が抱える問題に取り組むべく様々な場で地域活性化が実施されているが、その多くが経済の活性化に重きを置いた内容となっている。このような背景から、現在の地域活性化を「持続可能な開発のための教育(ESD)」の視点から再構築していくことが必要ではないだろうか。地域住民と外部者の交流による地域活性化の事例を基に、ESD をベースとした農山村の地域活性化の意義について考えた。

③16 : 55～

◆『自然療育活動』

実施者：高木 晴光（NPO 法人ねおす）

内容： 自然療育活動とは、福祉施設、病院、幼稚園、子育てグループを対象に、感覚機能を活性化させる自然散策や、野外スペースにおいて自然学習・遊びができる「癒し・憩いのコミュニティ空間と時間」を提供する活動のことである。この活動について紹介した。

◆『参加者の意識変化～岡山市の水辺教室アンケート結果～』

実施者：山田 哲弘（岡山県自然保護センター）

内容： 毎年8月に岡山市で開催している足守川水辺教室は、市内の小学4年生以上を対象とした自然体験系のイベントである。3年前から水辺の生物を調査するプログラム内容から持続可能な社会のための教育(ESD)を重視した内容に変わった。今回の発表では、ESDを重視した水辺教室のプログラムと、それを受けた子ども達对环境に対する意識が、直後(当日)・事後(約3週間後)でどのように変化したか、その年ごと、3年間の結果を紹介した。

④17 : 20～

◆『「森のようちえん」、日本では「里山のようちえん』

実施者：新田 章伸（NPO 法人里山倶楽部）

内容： ドイツ、デンマーク等、北欧で生まれ広まった「森のようちえん」。今、日本でもたくさんの「森のようちえん」が活動をしている。北欧での身近な自然は「森」、日本での身近な自然は「里山」。当初は北欧の模倣から始まった活動も日本で広がり始めてから10年を超え、日本の自然、気候、風土に合わせた「森のようちえん」＝「里山のようちえん」といえる日本的な実践活動に変化し定着してきている。具体例で紹介した。

◆『卵屋と絵描きと滝と鹿と過疎とTシャツと私』

実施者：鈴木 律子（はっとり農園）

内容： 娘二人と山梨市三富に移住し、有機農園に勤め始めたばかりの御用聞き絵描きである。今年度で地域から小学校が消え、伝統の童太鼓も存続の危機に。音を立てて過疎が進むこの美しい土地で、自分たちがまずハッピーに生きて暮らして、みんなのためにできることは？ドタバタなのにスローだけど挑戦の毎日。脱☆ピンボ－暇なし！そんな暮らしを簡単なライブペインティングで紹介した。

◆『ユースミーティング@白川郷 ～若手の挑戦は続く～』

実施者：田丸 真奈維(三田市有馬富士自然学習センター)

中谷 翔(トヨタ白川郷自然学校)

伊藤 由季(東京都立小峰公園 小峰ビジターセンター)

内容： 昨年の清里ミーティングで発足した「若手会」。環境教育に関わる若手同士のつながりを強め、スキル向上を目指して日々奮闘中。昨年の2月に「第1回若手会」を白川郷で開催した。若手会では、それぞれの課題を話し合い、ノウハウを共有するなど様々な活動をしている。その内容を紹介した。

◆『大教室での参加型授業の試み：教えるより学び合う場を！』

実施者：中野 民夫(東京工業大学/教員)

内容： 2012年から3年半、京都の同志社大学政策学部での200人を超える大教室で、ワークショップを応用した「参加型授業」を試み、対話や参加を重視し、学生のコミュニケーション力や主体性を育んできた。大教室でもここまでできる！という大学教育イノベーションの実践事例の発表をした。

⑤17:35～

◆『大学生による古民家再生—埼玉県名栗での活動紹介—』

実施者：平井 純子(駿河台大学/教員)

内容： 駿河台大学平井ゼミでは、名栗地区に空き家を活用した活動拠点を設置し、ダッシュ村のような活動を楽しみつつ、山間地域の課題とその解決策、そして地域活性化を考えるとともに、地域経済振興と雇用の創出を目指すことを目的とし、活動を行っている。地元で山を活用する活動を行う「楽山人」と協働しつつ、埼玉県や飯能市、地元の諸団体など、さまざまな方面との連携を図りながら進めており、学生たちの社会人基礎力の育成にもつながっている。

◆『「月暦」西暦しか知らないのは環境教育では大損！』

実施者：齊藤 透(〈月〉の会・東京)

内容： 暦は時間・空間のモノサシ。そのため、思考に多大な影響を及ぼしている。西暦(太陽暦)は明るさ・強さを是とするので、必然的に経済効率優先思考になってしまう。対して月暦(旧暦)は夜を主とし、水・生命の循環を基調とするモノサシ。知らないとおカルト的に見えるが、科学性は太陽暦より上。せっかく日本にいて「西暦しか知らない」のはもったいない。まして環境に携わるなら、知らないなんて… 科学・文化・歴史・風土、万事につながる小ネタの宝庫でもある「月暦」の紹介をした。

◆『持続可能な観光地づくりと国際基準導入の取り組み』

実施者：梅崎 靖志(NPO法人日本エコツーリズムセンター)

内容： 地域の文化及び自然資源への配慮を前提とした持続可能な観光地作りを目指す「サステナブル・ツーリズム」には、国連世界観光機関が推進する国際基準がある。エコセンでは、地球環境基金の助成を受けて、滞在型観光地作りにこの国際基準を活かすことを念頭に取り組みを進め、10月には尾瀬・片品にて国際認証フォーラム(第2回)を開催した。今回得られた成果と導入に向けた課題を中心に報告した。

◆『トヨタ白川郷自然学校のこれまでの10年とこれから』

実施者：岩田 由美/山田 俊行(トヨタ白川郷自然学校)

内容： トヨタ白川郷自然学校は、開校10周年を迎えた。これまで『共生』をテーマに、白川村を舞台にしたインタープリテーション、地域との共生、大人から子どもまで感動いただける自然学校の実現へと邁進し、約117,000人の方に自然体験プログラムを提供してきた。これからの10年は『共生につながる共育』がテーマである。トヨタ白川郷自然学校のこれまでの10年これからの10年を紹介した。

⑥17:50~

◆『超限界集落の早川町・南アルプス生態邑の取り組み』

実施者：小河原 孝生（株式会社生態計画研究所）

内容：日本で一番人口の少ない町・山梨県早川町。現在は南アルプス生態邑として、校舎の温泉宿、野鳥公園を拠点に、エコツアープログラムを展開すると共に、遊休農地の活性化等、野生生物と共生する地域づくりを行っている。3時間ワークショップへのお誘いを兼ねて、早川町での25年間に及ぶ取り組みについて紹介した。

◆『「決別！倍率神話」双眼鏡・天体望遠鏡 選定ナビ・3』

実施者：中村 照夫

内容：海外では許されない初心者向け天体望遠鏡セールスでの引っかけフレーズ、超高倍率強調広告。結果、「こんなもんか」と芽生えた興味も終了。良心的メーカーでさえ現状を無視できず自らも高倍率品をラインナップに。初心者へこそ基本的良品を最初に手渡しすることこそが、将来の上級者向け製品販売へとつながる。日本のこんな野放し状況が世界に比し、天文人口の圧倒的少なさを生んでいる。

◆『社会的インターンシップ構想 -そだちば-』

実施者：富田 桂太（NPO 法人ねおす）

内容：“そだちば”とは地域社会における中・長期インターンシップの機会を創出すること。「自分のやりたいこと」と「地域でできること」をつなげて考えられる若者を増やしたい。地域で若者の力を生かすことができる元気な地域が増えてほしい。という想いから、NPO 法人ねおすでは若者と地域が育つことへの手助けを目的にした“そだちば”という事業を行っている。インターンシップ受入実績2014年度1,014人(延人日)。

◆『新設アワード：アウトドアや自然の中での人づくり表彰』

実施者：山田 俊行（トヨタ白川郷自然学校）

内容：アウトドア素材メーカーをはじめ多数の企業協賛のもと、2017年2月にJAPAN OUTDOOR LEADER AWARD (JOLA)を開催する運びとなった。このアワードは、山や川や海、田畑や森林などのアウトドアフィールドで、未来を支える人を育てたいという想いを持ち、体験を大切にしたい人づくりを実践する方(応募対象者約23万人)の功績をたたえ表彰するものである。その概要について紹介した。

⑦18:05~

◆『Transcultural European Outdoor Studies』

実施者：高野 孝子（NPO 法人 ECOPLUS）

内容：5年前に始まった、EUが助成するアウトドスタディプログラム。体制も文化も異なる3カ国の大学が、共同で修士号を出している。2年間で、半期ずつ3カ国を回りながら、そこでの「アウトドスタディ」の伝統を学ぶプログラムである。日本語に訳されている「野外教育」とは何が違うのか、世界中から参加者が集まるダイナミックな様子を紹介した。

◆『安比高原における「南部駒」を使用したシバ草原の再生』

実施者：渋谷 晃太郎（岩手県立大学/教員）

内容：APPI高原スキー場に隣接して美しいブナ二次林やシバ草原がある安比高原。これらは、牛馬の放牧や、漆器の木材材、薪炭生産の場として利用されて成立したが、高度経済成長期以降、牛馬の放牧が減ったことで遷移が進み、かつての景観は徐々に失われつつある。このため、地元の団体が草原の刈払い等を実施、平成26年度からは、「南部駒」の再放牧を開始した。「南部駒」に草原の再生という新たな仕事を与えることで、馬文化を維持しつつ自然再生を図るという2つの目的を達成することを目指した活動について紹介した。

◆『地域の・家族の「木の実文化」を伝える環境学習』

実施者：奥井 かおり（兵庫県立大学大学院）

内容： 2015年、淡路島において木の実文化についての聞き取り調査を行った。自生する木の実の利用は、現在の老年世代において広い利用経験がみられるが、若年層の利用は著しく減少している。自生する木の実を通して「身近な自然への関心を引き出す」と、また、「町／村単位・家族単位の文化の継承」を目的として実施した環境学習の事例を紹介した。

⑧20：15～

◆『一緒にやろまい！川・虫・花・人 ～地域総活躍社会～』

実施者：浅岡 永理（麻布大学）

内容： 2012年より相模川河川敷で行っている環境活動の経過報告を中心に、その地域が現在抱える問題と今後の活動の展望を発表した。題して、「川・虫・花・人～地域総活躍社会プロジェクト～」！神奈川県相模原市南区新磯を中心とした相模川河川敷を舞台に、都市部における生きものと地域の新たな共生方法を見つけよう。

◆『どこまで続く？ジュニアもりレンジャー』

実施者：猪俣 寛（(公財)日本野鳥の会）

内容： 小4から中学生までを対象に、昨年より豊田市自然観察の森で「ジュニアもりレンジャー」の養成が始まった。子ども達の自主性を尊重しながら、「調べる」「守る」「伝える」の3つの活動をしている。今年は、自分の好きな自然を一般のお客さんにガイドできるように、調査や保全活動を行ってきた。その取り組みを紹介した。

◆『これでいいのか？福島の子もたちを取り巻く現実！』

実施者：佐々木 豊志（(一社)くりこま高原自然学校）

内容： 福島第一原発の事故から4年半。放射線量が高い地点がまだまだ存在する事実が十分に伝わらない。放射線の影響を受ける子どもたちが一番通る通学路、公園や河川敷など。地面から10cm、50cm、1mの高さを点ではなく線と面で詳細に測定をした結果を発表し、ここから何が問題なのか、問題提起をした。

⑨20：30～

◆『選択できる未来を目指して ～第2章～』

実施者：芦田 梢（麻布大学）

内容： 暮らしの環境教育ってどうすればできるのだろう。選択できる未来を目指して、昨年の清里ミーティングから1年間の活動を通して感じた思いをプレゼンテーションし、会場のみんなで一緒に考える時間とした。

◆『「豊かさ」を考えるヤップ島プログラム25年の歩み』

実施者：大前 純一／高野 孝子（NPO法人ECOPLUS）

内容： 「石のお金」で知られるヤップ島の集落にお邪魔するプログラムを1992年から展開している。参加者は、自然環境と深くつながった伝統的な暮らしの中で、自然の豊かさやひとの優しさを体感する。同時に先進国からの「支援」で整備された電気や道路やエンジンが、森や海を汚していることにも気づく。魚を分かち合うのではなく、冷蔵庫に入れて販売する変化。自然体験を出発点に世界と未来を見つめ直す学びを紹介した。

◆『世界のインタープリターとのトークセッション、ご報告』

実施者：浅野 智恵美（NPO法人もりの学舎自然学校）

内容： インタープリター愛・地球ミーティング、世界のインタープリターとのトーク・セッションが、10月11日に開催された。海外ゲスト5名（コスタリカ、ドイツ、ケニア、スリランカ、アメリカ）と共に日本の事例として、もりの学舎自然学校の活動を紹介した。もりの学舎は、愛・地球博記念公園内の森林楽園ゾーンにある愛知県環境学習施設のこと、森や水辺の自然体験、工作教室などを通じて、楽しみながら学べる。今回はトークセッションについて紹介した。

早朝ワークショップ

2日目(15日) 7:00~8:00

◆朝の楽しい修行：ヨーガと瞑想と歌

実施者：中野 民夫 (東京工業大学/教員)

ヨーガをする時の約束事は、①人と話さない、②がんばらない、③ゆっくり丁寧に(呼吸に合わせて)。「シャバ・アーサナ」という完全弛緩の屍のポーズと、「スーリヤ・ナマスカル」という太陽礼拝の一連のポーズを教えてもらいながら、自然な呼吸をして調べ、今ここに生きている自分を感じる。

瞑想の後は、実施者の訳詞・作曲・生ギター演奏による「自然の摂理 (オーム・イーシャーヤー・ナマハ)」という歌を全員で歌い、穏やかな朝のゆったりした修行となった。



◆手づくりのもみ殻コンロ、ペール缶めかくどの実演！

実施者：梅崎 靖志 (NPO 法人日本エコツーリズムセンター)

「めかくどを知っていますか？」という問いに、手を挙げたのはほんの数人。穴をあけたペール缶の真ん中にトマト缶を入れ、そのトマト缶の周囲に大量のもみ殻を。トマト缶の中には薪やスギの葉を入れて、火をつける。小雨にはなっていたものの、前日から降り続く雨で薪やマッチが湿気ていたため、なかなか火が付きにくかったが、それもめかくどの醍醐味。火が大きくなると、薪からもみ殻に火が移り、火力が安定する。そこでヤカンをセッティング。

めかくどは一度火がつけば、もみ殻が燃え尽きるまで薪を足さなくても火が消えない全自動！沸かしたお湯で入れたお茶をいただきながら、実施者の実践するパーマカルチャーの話や、「あるもの」で出来る生活について、意見を交わす時間となった。



◆ロシアからの旅人と再会しよう ～冬鳥との出会いを求めて～

実施者：安西 英明 ((公財)日本野鳥の会)

前夜からの小雨は上がり、朝もやの清泉寮前に約20名が集合。広場横のシラカンパの梢から、さっそく小鳥の鳴き声。「お～、カワラヒワですね。一年中日本で見られますが、このカワラヒワはロシアから渡ってきたものかもしれません」と、実施者の案内。ヒガラやシジウカラ、アカゲラなども次々に姿を見せてくれた。散策後は室内で模型や標本を使い、鳥の嘴と植物や虫との関係、飛ぶ仕組み、軽さの秘密などを学んだ。

身振り手振りの解説で、野外観察だけではわからない命のあり方、自然の仕組みにもふれた1時間となった。



◆清里朝散歩

実施者：坂本 浩基 ((公財)キープ協会 実習生)

通常よりも暖かい気温 11 度の霧の中、まずは香りを頼りに、特定の植物を探すクイズからスタート。森の中を進むにつれて、よく見ればいろいろなモノが発見できる。各自が見つけたお気に入りの小さな「かたち」をポジスライドケースに閉じ込めた。お互いに光に透かして共有すると、それぞれの視点の違いやセンス、自然の不思議さに感嘆。そして、深呼吸をしながら音に耳を澄まし、水を感じる。水は命を育むと同時に、動物が命を落とす場所でもあることを知る。森は生と死が重なり、また、小さなモノの集まりでできていることを感じながら、森に新たなイメージを抱きながら帰り道を歩く時間となった。



当日募集ワークショップ

3 日目(16 日) 9:00~11:30

◆全体会 3・閉会式を企画プロデュース

実施者：森 高一 (NPO 法人エコツーリズムセンター)
川嶋 直 ((公社)日本環境教育フォーラム)

清里ミーティングの閉会式を企画・実施するワークショップ。まず、プロデュースという言葉に惹かれて集まった参加者同士で自己紹介を簡単に済ませ、その後、外に出てジャージーソフトを食べながら、和気あいあいと意見が出された。

会期中初めての晴天で、屋内でのプログラムが多かったことから、「外に出て、体を動かして、全体をふりかえれる場にしよう」というコンセプトのもとプログラムを作ることになった。また、全体写真は、ただで清里が楽しそうに見えるよう構図も練った。その後、リハーサルや準備を行い無事閉会式を迎えた。



◆都会っ子集合！地方と都市部をつなげよう！

実施者：片山 裕美子 (酪農学園大学)

今回の清里ミーティングの内容を受け、地方の人口減少が非常に深刻な問題となっている中で、都市部に住んでいる人たちはどうすればよいのかを話し合った。地方と都市部を結びつけるには観光では持続性がない。一番重視すべきなのは、地方と都市部の利害関係が一致した方法を見つけることである。その方法として「第二のふるさと」を生み出させる。地方のことについて都市部に住む人たちが、地方を訪れない人たちに訪れてくれるようにアプローチすべきではないのか。共に考える時間となった。



◆ 3 日間のふりかえり WS

実施者：高木 幹夫 (株式会社日能研)

鴨川 光 ((公社)日本環境教育フォーラム)

2 日目に参加したワークショップ内容をふまえて自己紹介をした後、「ワークショップとは何か」について、グループ及び全体で意見を交換した。

後半は屋外に出て、「えんたくん」を用いた簡単なワールドカフェを行い、今回の清里ミーティングで印象に残っている事、30 回を迎える次回への要望などについて話し合った。どのグループからも、第 1 回から 30 年間のふりかえりをしてはどうかという意見があがった。終始、進行にうまく乗って、参加者全員が活き活きと意見を発信する場となった。



◆（マイナス）ゼロ→1への挑戦

実施者：飯野 恵理（環境省自然環境局国立公園課）

濱谷 幸子（愛知県環境部環境活動推進課）

環境に関心が薄い人をどう巻き込んでいくかということ語り合うワークショップ。対立関係にあるステークホルダーや環境に興味の薄い層へのアプローチやインタビューレーションをする際の課題や苦悩について、参加者間で事例を共有し、課題解決に向けた方策を議論した。途中、環境問題と自分との関わりに気づくワークも行われた。最後には、「現実的な課題に直面し、環境への関心が薄い層の理解を得られるように努めている立場にいる人々」の重要性やアプローチの具体策などについて、参加者全員が納得する共通認識に至ることができ、大変充実したワークショップとなった。



◆初心者のためのアイス・ブレイク大集合♪

実施者：山田 哲弘（岡山県自然保護センター）

自然体験プログラム等で最初に行うアイスブレイキングを実際にやってみようというワークショップ。

実施者だけでなく、参加者も自身の経験を元にアイスブレイキングの案を出し合い、子どもから大人まで楽しめるアイスブレイキングの手法を、身体や生物多様性に関するカードを使って、“楽しみながら”学び合うことができた。



◆野外での事故に備える

実施者：横堀 勇・寺田 達也（（一社）ウィルダネスメディカルアソシエイツジャパン（WMAJ））

野外では事故が起きた場合、発見から搬送、病院に向かうまでの時間が非常にかかる。そのため、事故が起きてから救急車が来るまで、傷病者へのファーストエイド（応急処置）が重要である。今回のワークショップでは、都市型救急法の知識や技術で行う「野外での傷病者対応」の難しさ（都市型救急法の地理的な限界）について体験を通じて学び、野外に適した傷病者評価の方法を学んだ。さらに、屋外に移動し、倒れている人の呼吸確認方法を実践も行った。野外活動での事故で、自分たちに何ができるかを実践的に学んでもらうことができた。



◆銀粘土で作る 木の葉の純銀アクセサリ

実施者：平間 雅司・半田 清昭（相田化学工業株式会社）

銀粘土を利用したアクセサリ作りのワークショップ。銀粘土とは純銀を微末にし、水とのりを合わせて粘土状にしたものである。これは粉末冶金という技術を応用したもので、通常より低い温度で銀の加工が可能となる。そのため幅広い年齢層の人を対象に、簡単に純銀クラフトが出来るようになっている。環境教育の観点から見ると、貴金属のリサイクルの実際や、環境問題、ごみ問題について広く学ぶことができる教材となり、銀粘土によるアクセサリ作りの体験を通じて、環境保全に対する意識を育むことができる時間となった。



◆虫かふえ オープン!

実施者：川田 奈穂子 (トヨタの森)
成田 苑子 (帝京科学大学)

虫好きや虫が生活環境に定着している参加者が大多数を占めた虫かふえ。まずは参加者の経験から、若い人に虫がどう思われているのか話し合った。その後、屋外に出て、虫探しを実施。ザトウムシを参加者全員の手に乗せリレーを行ったり、カメムシ科のヒメナガメの観察を行ったり、虫好きが集まったからこそできる観察会となった。

最後には、「虫好き作成会議」を行い、虫に興味がない人へのアプローチを具体的に考える場となった。



◆ボードゲームで生態系を学ぼう!

実施者：奥宮 健太 (BEANS BEE)

モモンガのぬいぐるみを渡しながら、お互いについて知るというユニークなアイスブレイクからスタートした本ワークショップ。河川をモデルにしたシミュレーションゲームをプレイすることを通して『エコロジカルシンキング』の視点から、生態系の仕組みについて学べるという、これまたユニークなものである。プレイヤーのそれぞれがモズやシロツメクサなどの役割に応じて動植物の世界を疑似体験することを通して、生態系のバランスを保つことの重要性を身をもって体験できるワークショップとなった。



◆実験!発見!やっぱすっきゃねん!

実施者：田村 理紗・高橋 杏・川崎 美里
(東京ガス株式会社 ガスの科学館)

実際にガスの科学館で行われている、くらしと環境問題をつなげる実験プログラム「実験!発見!CO₂!」を例として、披露した。プログラムについて、参加者と共にフィードバックを行い、環境教育プログラムの可能性と課題について考えた。

また、参加者が行っている環境教育の実践をふりかえることで、その可能性と課題を洗い出し、参加者・実施者が個々で行っている環境教育の魅力について再認識し、それぞれ活動の共通の可能性や課題を共有することが出来た。



◆清里 1/200 人の紙芝居づくり

実施者：竹田 真佑美 (トヨタ白川郷自然学校)

地域の魅力を紙芝居で伝えよう!というワークショップ。なぜ紙芝居なのか?ということから、地域の人と共に作り上げたいが現状は難しいという状況であることに對して、実現するためにはどうするべきかという意見が、参加者から次々と出た。

その後、題材を集めるため山梨県立八ヶ岳自然ふれあいセンターへ。スタッフから清里という地域についての話を聞く。清泉寮に戻り、それぞれが感じた魅力を出し合い、それらを時系列に並べてストーリーが完成。

紙芝居の完成までいかなかったが、「自分たちが知った清里の新しい魅力を他の参加者にも伝えたい!」という熱い思いから、閉会式の後に発表の場を設けた。



◆ユース MTG 清里 ver. ～熱意ある若者求む！！～

実施者：中谷 翔（トヨタ白川郷自然学校）

佐藤 大介（渋谷はるのおがわプレーパーク）

伊藤 由季（東京都立小峰公園 小峰ビジターセンター）

田丸 真奈維（三田市有馬富士自然学習センター）

このワークショップでは、分野のそれぞれ違う若者同士のつながりづくり、同年代だからこそその悩みの共有を目的とした。最初に自己紹介を行った後に、2つのグループに分かれ、今自分が何をやりたいのかを書き出した。それをもとに参加者同士で自分の悩みや想いを語り合った。最後に自分の目標となる今後のアクションプランを、参加者がそれぞれ発表した。悩みや意見に対して共感し合う参加者の様子が見られ、今後の自分の方向性を考える意義深いものとなった。



◆しょうゆ絞り/かとうさんちの暮らし

実施者：加藤 大悟（NPO 法人都留環境フォーラム）

「やりたいことをやってみること」がモットーの実施者。初めてのログハウス作りや田んぼ作り、環境教育において人と人の出会いの大切さを知る。仕事をやることにおいて、まず何より自分のやりたくない仕事をやるよりも、好きな仕事を続けていくことによって、あらゆる可能性に繋がってくることを伝えた。また、実際に自分で作るおいしさを伝えるためにも、参加者としょうゆ作り体験を通して、自給する大切さやおいしさを伝えたワークショップとなった。



3 日目

全体会 3・閉会式

全体会 3 は、今回も当日募集ワークショップの中で、参加者有志(清里ミーティング 2015 企画委員を含む)により企画された。この時間では、3 日間をふりかえるため、司会者からの設問に、小グループで意見を交わし合うスタイルで進行した。

最終日は天気にも恵まれたため、屋外の秋空の下、和やかな雰囲気に入れながら、清里ミーティング全体の締めくくりの時間とした。



今回、全体会 3 を企画したメンバーのグループ名は、“ジャージーズ”。清里ミーティングの最後の締めということで、司会者 2 人が出す設問に答えながら、この 3 日間をふりかえる内容とした。

設問①:「3 日間で清泉寮の温泉に入った回数は？」

4 回以上の方が非常に多く、参加者からも驚きの声があがる。その後、さらに 3~4 人の小グループに分かれ、「清里で過ごした 3 日間の中で印象に残ったこと、また一番に残ったこと」について意見が交わされた。「他のグループの話も聞きたい!」という声を受け、いくつかのグループから全体に共有された。「美味しい食事」、「虫好きな方々との交流」などが話題にあがった。

設問②:「清里でもう一度食べたいものは？」

野菜系・肉系・ソフトクリームなどジャージーミルクで作られた商品系・スイーツ系の 4 グループに分かれた。

さらに、小グループでは、「この 3 日間の清里ミーティングでの素敵な出会い」について意見が交わされた。多くのグループの中で、面白い人や今後の仕事仲間に会ったといった声が聞かれた。趣味

の合う方や、仕事の姿勢で影響を受けた方、また、就職先となる方と巡り合えたなどの話が出た。

設問③:「3 日間で話した人数は？」

「えー、わからない」といった声も飛び交う中、50 人未満・100 人未満・200 人未満・200 人以上の 4 つのグループに分かれた。

小グループでは、「清里で過ごした時間から、日常に持ち帰りたいもの、また持ち帰ったものをどう使いたいか」について意見を交わした。各グループからは、「学んだ知識を仕事に活かしたい」、「名札の横に付けている初心者マークを外し、新たな自分で仕事をしたい」、「新たな視点を自分の様々な活動に活かしたい」といったコメントがあり、「持ち帰ったものは大事に仕舞わずに、ぜひ周りの人とシェアして下さい。」と司会の 2 人が締めた。

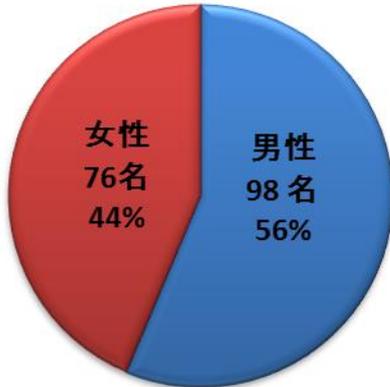
最後に、(公社)日本環境教育フォーラム/川嶋直理事長より「ここで出会ったものを次の仕事や活動に活かしていただきたい。」と閉会の言葉を述べ、この 3 日間を締めくくった。



参加者データ

～データに見る清里ミーティング 2015～

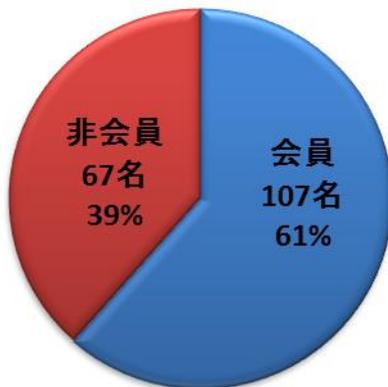
性別



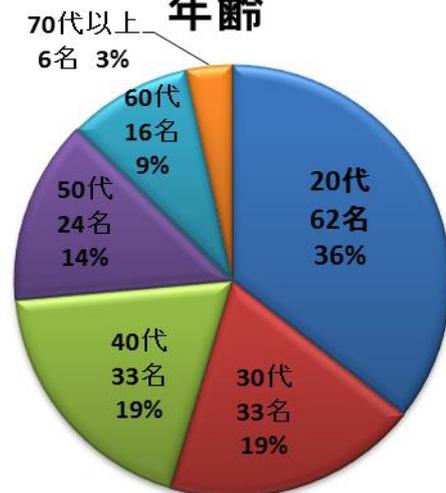
参加回数



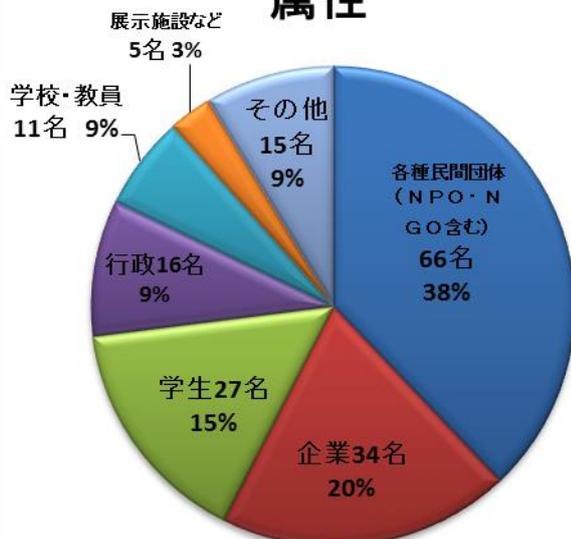
(公社)日本環境教育フォーラム 会員



年齢



属性



地域



スタッフ名簿

※企画委員兼任のスタッフには所属右端に

㊦ マークを入れています。

氏名	所属
金久保 優子	(公社)日本環境教育フォーラム ㊦
鴨川 光	(公社)日本環境教育フォーラム
京極 徹	(公社)日本環境教育フォーラム
柴原 みどり	(公社)日本環境教育フォーラム
清水 誠二	(公社)日本環境教育フォーラム
瀬尾 隆史	(公社)日本環境教育フォーラム ㊦
高松 敬委子	(公社)日本環境教育フォーラム
垂水 恵美子	(公社)日本環境教育フォーラム
饗場 葉留果	(公財)キープ協会
伊澤 菜美子	(公財)キープ協会
石川 昌稔	(公財)キープ協会 ㊦
岩渕 真奈美	(公財)キープ協会
小野 明子	(公財)キープ協会
川村 悦子	(公財)キープ協会
齋藤 園子	(公財)キープ協会
坂本 浩基	(公財)キープ協会
佐藤 陽介	(公財)キープ協会
関根 健吾	(公財)キープ協会
高木 恭子	(公財)キープ協会
瀧上 舞	(公財)キープ協会
田村 のり子	(公財)キープ協会
千葉 麻里奈	(公財)キープ協会
鳥屋尾 健	(公財)キープ協会
中山 孝志	(公財)キープ協会
本田 晶	(公財)キープ協会
増田 直広	(公財)キープ協会
村井 孝一	(公財)キープ協会
吉田 有希	(公財)キープ協会
村山 敬洋	(一社)地域ESD事務所つむぐ

(団体別五十音順)



清里ミーティングの仕掛け人 企画委員 ㊦

(公社)日本環境教育フォーラム理事長 川嶋 直

企画委員名簿

氏名	所属
田之下 雅之	(株)Tクラフト・プラス
星野 智子	(一社)環境パートナーシップ会議
村上 千里	NPO 法人持続可能な開発のための教育推進会議(ESD-J)
森 高一	NPO 法人日本エコツーリズムセンター

(五十音順)

ボランティアスタッフ名簿

氏名	所属
市川 理子	立教大学
大垣 柚月	東京農業大学
大塚 春奈	国際基督教大学
釜谷 優太	麻布大学
木下 遥	麻布大学
工藤 愛莉	立教大学
坂巻 栄一	
高木 夏子	立教大学
直井 裕輝	麻布大学
中井 香緒里	(株)アウトドアサポートシステム
中嶋 実	北海道大学
中野 瞳	麻布大学
堀口 丈	立教大学
本多 かおり	立教大学
前島 雄市朗	関西学院大学
森 健悟	早稲田大学
森田 茉莉子	麻布大学

(五十音順)



清里ミーティング2015を支えてくれたボランティアスタッフの皆さん、ありがとうございました!!

清里ミーティング 2015 報告書

発行者：公益社団法人日本環境教育フォーラム

※この報告書および清里ミーティングに関するお問い合わせは下記まで。

〒160-0022

東京都新宿区新宿 5-10-15 ツインズ新宿ビル 4F

公益社団法人日本環境教育フォーラム

TEL : 03-3350-6770 FAX : 03-3350-7818

URL : <http://www.jeef.or.jp/>